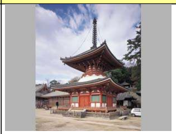
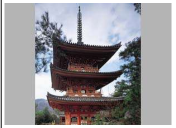
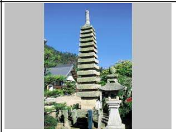
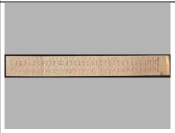
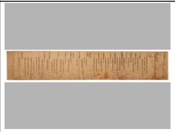
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	国宝（建造物）	浄土寺多宝塔	じょうどじたほうとう	1基	尾道市東久保町	明34.3.27 昭28.3.31（国宝指定）	三間多宝塔，本瓦葺		鎌倉時代末期，嘉暦3年（1328）建立。大日如来及び脇侍（わきじ）（尾道市重要文化財）を安置し，内部には彩色が施され，壁面には真言宗の名僧を描いた真言八祖像がある。 多宝塔としては，規模が大きい上に全体のつりあいがよく，高野山金剛三昧院や石山寺の多塔宝と並ぶすぐれた塔である。牡丹・唐草に蝶の透かし彫りをした蟇股（かえるまた）など，華麗な装飾に富み，その整った容姿および手法によって，鎌倉時代末期の代表的な建築とされる。昭和11年の解体修理で，屋根の上の相輪（そうりん）の中から経巻など多くの納入品が発見された。		関連施設：浄土寺宝物館 （0848-37-2361）
国	国宝（建造物）	浄土寺本堂 附厨子1基 棟札2枚 浄土寺境内図2枚	じょうどじほんどう	1棟	尾道市東久保町	大2.4.14 昭28.3.31（国宝指定）	桁行五間，梁間五間，一重，入母屋造，向背一間，本瓦葺 棟札　2枚（嘉暦二年四月十一日，正徳二年四月十一日各1枚）		浄土寺は，鎌倉時代末期（14世紀初め）に炎上したが，尾道の人々によって，数年後には再建された。この本堂も尾道の人沙弥（しゃみ）道蓮（どうれん），比丘尼（びくに）道性（どうしょう）が発願して，鎌倉時代の嘉暦２年（1327）に大工藤原友国，同国貞により建築されたものである。前面二間通りを外陣とし，うしろを内陣とする密教式平面である。和様を基調としているが，桟唐戸（さんからど），花肘木（はなひじき），二斗などを用いたいわゆる折衷様式である。		関連施設：浄土寺宝物館 （0848-37-2361）
国	国宝（建造物）	向上寺三重塔	こうじょうじさんじゅうのとう	1基	尾道市瀬戸田町	大2.4.14 昭33.2.8（国宝指定）	三間三重塔婆，本瓦葺，高さ19m		室町時代・永享4年（1432）建立の塔。信元・信昌を檀那として建立された。全体に和様を基調とするが，各重の垂木を扇垂木（おうぎたるき）とし，花頭窓（かとうまど）を入れるなど，細部にかなり濃厚に禅宗様の手法が取り入れられている。肘木鼻（ひじきばな）やすみ木持ち送りの彫刻なども巧みに作られ，尾垂木下絵様肘木（おだるきえようひじき）の先端は全部彫刻を施し，かつ彩色を施した絢爛（けんらん）豪華なものである。 向上寺は瀬戸田港北側，瀬戸田水道を一望できる小高い丘の上にある。室町時代（1333～1572）に始まる禅宗寺院で，小早川氏一族である生口氏と深い関係を持っていた。		
国	国宝（絵画）	絹本著色普賢延命像 画絹裏に「延命像仁平三年四月廿一日供養」の墨書がある	けんぽんちゃくしょくふげんえんみょうぞう	1幅	尾道市西土堂町	昭42.6.15 昭43.4.25（名称変更） 昭50.6.12（国宝指定）	二十臂像で四白象にのり各象首には四天王を頂く形式	縦146cm，横85cm	平安時代後期の仁平3年（1153）の作。本品は二十臂（ぴ）延命像としては最古の作品であり，描写の上でも像の尊顔や二十臂をかたどるたゆみない朱線，強い暈（くま）どり，大ぶりな彩色文様に加えて，象頂の四天王に見られる力強い動きの表現など，鎌倉時代（1192～1332）に見られる画風に近い特色を持つ。時代様式の変遷を知るうえで貴重であり，他の作品の年代決定にあたって基準となる作品である。 ※普賢延命…特に延命を功徳とする普賢菩薩像。腕が２本のものと，20本の腕を持つ二十臂延命像がある。		
国	重要文化財（建造物）	浄土寺阿弥陀堂	じょうどじあみだどう	1棟	尾道市東久保町	大2.4.14	桁行五間，梁間四間，一重，寄棟造，本瓦葺		浄土寺本堂（国宝）の東隣に立つこの建物は，南北朝時代，康永4年（貞和元，1345）再建と伝えられる。本堂，多塔宝（国宝）が再建された後に建てられたものと思われる。優れた和様建築と評価されている。本尊は阿弥陀如来坐像（県重文）である。 浄土寺は尾道有数の古刹（こさつ）で，尾道水道東口付近に位置する。鎌倉時代（1192～1332）以後，西大寺流律宗寺院として特に信仰を集めた。		関連施設：浄土寺宝物館 （0848-37-2361）
国	重要文化財（建造物）	西国寺金堂 附　厨子　1基	さいこくじこんどう	1棟	尾道市西久保町	大2.4.14	桁行五間，梁間五間，一重，入母屋造，向拝一間，本瓦葺		西國寺は行基菩薩の開基と伝えられる真言宗の古刹（こさつ）である。 金堂は，至徳3年（1386）建立で，和様を基調とした建物である。側柱上が二手先で蛇腹支輪及び小天井付にし，向拝（こうはい）は三ッ斗組である。それに虹梁（こうりょう）が掛けられ中供（なかそなえ）に蟇股（かえるまた）があり，虹梁の柱外には拳鼻（こぶしば）が，また主屋の方へは手挟（たばさみ）が出て威厳が示されている。入母造（いりもやづくり）の妻飾（つまかざり）は二重虹梁大瓶束（にじゅうこうりょうたいへいづか）で，屋根に重量感があり，規模壮大で手法雄健な堂々とした感じを与える。内部の厨子（ずし），須弥壇（しゅみだん）も秀麗である。木造薬師如来坐像（重文）が本尊である。		
国	重要文化財（建造物）	西国寺三重塔	さいこくじさんじゅうのとう	1基	尾道市西久保町	大2.4.14	三間三重塔婆，本瓦葺		この三重塔は，永享元年（1429）足利義教によって建立された。室町時代（1333～1572）によく行われた復古建築の純和様で，和様と禅宗様の混交の風に飽き足らず，奈良時代（710～793）への復帰をめざしたものである。どっしりとした美しい塔で，回縁がなく，石製基壇の上に立つ珍しい遺例である。		
国	重要文化財（建造物）	光明坊十三重塔	こうみょうぼうじゅうさんじゅうとう	1基	尾道市瀬戸田町御寺	昭2.4.25	石造，花こう岩製		この塔は，鎌倉時代，永仁2年（1294）建立であり，基壇に銘がある。西大寺流律宗の僧侶である忍性（にんしょう）が建てたと伝えられ，基壇には作者の心阿の名もみえる。軒は厚く，力強い反りを示し，初層四面の仏の種字（しゅじ）は薬研（やげん）彫りで，雄健な鎌倉時代（1192～1332）の代表的な作品である。 光明坊は，生口島南岸のほぼ中央にある，真言宗の古刹（こさつ）である。		
国	重要文化財（建造物）	天寧寺塔婆 附　銘札　1枚	てんねいじとうば	1基	尾道市東土堂町	昭24.2.18	三間三重塔婆（元五重），本瓦葺		天寧寺は貞治6年（1367）に足利義詮が建て，普明国師を開山とした曹洞宗の大寺である。のち本堂などは雷火で焼失し，この塔だけが残った。 塔婆は嘉慶2年（1388）の造立で，元禄5年（1692）上の二重を撤去し三重塔婆に改修された。現存する部分は相輪まで当初のものをよく伝えており，和様を基調に禅宗様が濃厚にとり入れられ，規模雄大で手法もまたすぐれている。		

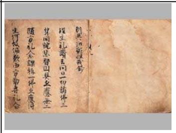
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（建造物）	浄土寺納経塔	じょうどじのうきょうとう	1基	尾道市東久保町	昭28.8.29	石造，宝塔基壇付	高さ2.7m	弘安元年（1278）10月，尾道の富商・光阿弥陀仏のために，子息の光阿吉近（こうあよしちか）が建てた供養塔。光阿弥陀仏は，浄土寺が定証（じょうしょう）によって再興される以前に，現在の浄土寺阿弥陀堂などの修造に尽力した人物である。 塔身に胎蔵界四仏の種字をきざみ，法華経・浄土三部経・梵網経（ぼんもうきょう）などを奉納したものである。基礎に格狭間（こうざま）をつけ，塔身の上に高欄を設けるなど整備した形を示すが，笠の上に露盤をおき請花・宝珠にしてあることは古調で，大きい基壇とあいまって重厚豪快な感じがする。鎌倉時代（1192〜1332）の石造宝塔の中では年代が古く，形態もよく整った優品である。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
国	重要文化財（建造物）	浄土寺宝篋印塔	じょうどじほうきょういんとう	1基	尾道市東久保町	昭28.8.29	石造	高さ3.2m	沙弥行円など四名の逆修（ぎゃくしゅ）や光孝らの追善のため，南北朝時代の貞和4年（1348）10月1日に建立された。 みごとな格狭間（こうざま）つきの基礎の上を美しい反花（かえりばな）とし，金剛界四仏の種字をきざんだ塔身を安置し，突起には八方天を種字で現している。格狭間には造立の趣旨が刻まれている。 基礎と塔身の間に受台を入れていることは，伊予や備後南部の宝篋印塔に見られる地方的特色である。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
国	重要文化財（建造物）	浄土寺山門 附　棟札　1枚	じょうどじさんもん	1棟	尾道市東久保町	昭28.8.11（県指定） 昭28.11.14 平6.7.12（露滴庵（附中門）分割）	四脚門，切妻造，本瓦葺，両袖潜付		浄土寺の表門で，南北朝時代（1333〜1392）に再建されたすぐれた建築である。本堂と同じ工匠の手になったのか，本堂向拝の軒の規矩と同じ規矩をもつことは，あまり時代の差がないことを示すと思われる。側面の妻の部分の板蟇股（かえるまた）に足利氏の家紋である「二引両」が表されている。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
国	重要文化財（建造物）	浄土寺宝篋印塔	じょうどじほうきょういんとう	1基	尾道市東久保町	昭36.3.23	石造	高さ1.9m	浄土寺境内の南側にあり，「足利尊氏の墓」と称されている。 非常に洗練された姿の塔で，各部分の彫成つりあいがよくとれた引き締まった堅実な姿である。最下層の反花座（かえりはなざ）にある複合の蓮弁及び基礎側面の格狭間（こうざま）は大きくみごとである。塔身には金剛界四仏を種字（しゅじ）で配し，笠の隅飾はやや外にかたむき，二弧の内側に八方天の種字をあらわしている。 相輪を完備した，南北朝時代（1333〜1392）における中国地方の宝篋印塔の代表作である。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
国	重要文化財（建造物）	西郷寺本堂	さいごうじほんどう	1棟	尾道市東久保町	昭36.6.7	桁行七間，梁間八間，寄棟造，本瓦葺		南北朝時代の文和2年（1353）に二代目住持の託阿（たくあ）が発願して造られた建造物である。角柱上に舟肘木を置くだけの簡素な形式であるが，方三間の内陣の周囲を外陣がめぐる形式の平面は浄土教に特徴的で，時宗本堂最古の遺構として貴重である。 西郷寺は時宗に属し，正慶年間（1332〜1334）に遊行六代の一鎮によって創始されたと言われる。当時は「西江寺」と称し，それを示す石柱と寺号扁額を境内及び本堂内に伝えている。 ※時宗…鎌倉時代（1192〜1332），一遍上人（1239〜1289）が開いた浄土教の一派。踊念仏で知られる。		
国	重要文化財（建造物）	西郷寺山門	さいごうじさんもん	1棟	尾道市東久保町	昭36.6.7	棟門，本瓦葺		室町時代の貞治年間（1362〜68）の建築で，板蟇股（かえるまた）や破風などに室町時代の様式がみられる。 西郷寺は時宗に属し，正慶年間（1332〜1334）に遊行六代の一鎮によって創始されたと言われる。当時は「西江寺」と称し，それを示す石柱と寺号扁額を境内及び本堂内に伝えている。 ※時宗…鎌倉時代（1192〜1332），一遍上人（1239〜1289）が開いた浄土教の一派。踊念仏で知られる。		
国	重要文化財（建造物）	吉原家住宅 主屋（附便所1棟）　1棟 納屋（附棟札1枚）　1棟 附鎮守社　1棟 家相図　5棟	よしはらけじゅうたく	2棟	尾道市向島町江奥	昭46.4.30（県指定） 平3.5.31	主屋／桁行20.1m，梁間9.1m，寄棟造，茅葺，西面下屋附属，本瓦葺 納屋／桁行9.9m，梁間4.0m，切妻造，本瓦葺 鎮守社／一間社流見世棚造，鉄板葺		向島の豪農であった吉原家の住宅で，同家に伝わる祈祷札などから江戸時代，寛永12年（1635）の建築と思われる。規模の大きい整形六間取りに土間を持ち式台の痕跡もたどれる建物である。土間の中央には柱を建てず，二重の梁組で大きな空間を構成しており，当時としてはかなり上等な構造である。土間脇に建具はなく，ごく初期の段階では土間に格子（こうし）戸や格子窓，その上部に小壁もない時代があった古い農家の伝統をそのまま伝えていると思われ，瀬戸内海沿岸の民家の形態をよく保存している。		
国	重要文化財（建造物）	浄土寺 方丈　1棟 唐門　1棟 庫裏及び客殿　1棟 宝庫　1棟 裏門　1棟 露滴庵　1棟 附中門　1棟 棟札　2枚 旧食堂厨子及び須弥壇　1具	じょうどじ	6棟	尾道市東久保町	昭63.12.26（県指定） 平6.7.12	方丈／桁行16.0m，梁間13.0m，一重，寄棟造，本瓦錣葺 唐門／一間向い唐門，本瓦葺 庫裏及び客殿／角屋付き庫裏と客殿の複合建築，切妻造，本瓦葺。 宝庫／土蔵造，桁行6.0m，梁間3.9m，二階建，切妻造，本瓦葺 裏門／長屋門，桁行14.9m，梁間5.0m，切妻造，本瓦葺 露滴庵／三畳台目茶室，水屋及び四畳・四畳半の勝手よりなる，一重，入母屋造，茅葺		浄土寺は鎌倉時代（1192〜1332）に始まり，尾道を代表する古刹（こさつ）の一つである。境内には本堂，多宝塔や阿弥陀堂などの中世建築と方丈などの近世建築がよく残され，統一された寺院建築群となっている。 庫裏（くり）及び客殿は享保4年（1719）建立，方丈は元禄3年（1690）尾道の豪商である橋本家が施主となって再建された。 露滴庵（ろてきあん）は，三畳台目の席に水屋と後補の勝手を付属させた茶室である。豊臣秀吉が桃山城内に建てた茶室「燕庵」を移したものと伝え，文化11年（1814）向島の天満屋が浄土寺に寄進したという。いわゆる織部（おりべ）好みの風格のある建物である。 唐門は総ケヤキ作りの小さな一間の向唐門で正徳2年（1712）建築，宝庫は二階建て土蔵で，宝暦9年（1759）建築。裏門は長屋門で18世紀後期の建築である。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（建造物）	常称寺 本堂１棟 観音堂１棟 鐘撞堂１棟 大門１棟 附　墓処門１棟	じょうしょうじ ほんどう かんのんどう かねつきどう だいもん	4棟	尾道市西久保町	平19.12.4	本　堂　桁行五間，梁間六間，一重，入母屋造，本瓦葺 観音堂　桁行三間，梁間三間，一重，宝形造， 向拝一間，本瓦葺 鐘撞堂　桁行一間，梁間一間，一重，入母屋造，本瓦葺 大　門　四脚門，切妻造，本瓦葺 附・墓処門　一間薬医門，本瓦葺		常称寺は，鎌倉時代後期の正応年間（1288～93年）に，時宗二代・真教によって創建されたと伝えられる寺院である。本堂は室町中期，観音堂は室町後期，鐘撞堂は江戸前期，大門は室町前期の建築とみられる。それぞれの建物は，後世の改造を受けながらも多くの当初材を残しており，往時の姿をよく伝えている。 本堂は，外観を和様，内部構成を禅宗様とし，内陣・外陣と脇陣を一体的空間とするなど，中世時宗本堂の特徴をよく表している。また大門は，現存する常称寺の建造物のなかでは最も古く，その重厚な構えは当時の寺格の高さを体現している。観音堂や鐘撞堂も，各時代の尾道周辺地域の意匠的特徴を備えており，当地域における建築文化の様相を示す貴重な遺構である。 中世時宗寺院は全国的に遺存例が少なく，そのなかでも室町時代の遺構が３棟も残っている例は希少である。また，室町前期から江戸前期にわたって建てられた諸堂は，それぞれの時代的・地域的特徴をよく備えており，時宗寺院の伽藍構成の歴史的展開を理解する上で，学術的な価値が高い。		関連施設：おのみち歴史博物館（0848-37-6555）
国	重要文化財（建造物）	旧大浜埼通航潮流信号所施設 通航信号塔 昼間潮流信号機 夜間潮流信号塔（大浜埼灯台） 附・囲障（上段・下段） 検潮器浪除塔 附・旗竿 石垣（上段・中段・下段）	きゅうおおはまさきつうこうちょうりゅうしんごうしょしせつ つうこうしんごうとう ひるまちょうりゅうしんごうき やかんちょうしゅうしんごうとう（おおはまさきとうだい） けんちょうきなみよけとう	１棟３基	尾道市因島大浜町	令和６年（2024）８月15日			瀬戸内海の狭水道、布刈瀬戸に面した因島の北東端に位置する。航行船舶に交通状況や潮流の方向を告知するため設置した通航潮流信号所施設。明治４３年の設置時に、通航信号塔及び昼間潮流信号機、検潮器浪除塔を新築し、同２７年建設の灯台を転用して夜間潮流信号塔とした。通航信号塔は屋根上に3つの角塔を並べ、木板で〇△□の記号を表示して対向船舶の位置を知らせた。現存唯一の木造信号塔として貴重。夜間潮流信号塔は信号所の廃止後、灯台として再度点灯した。近代交通標識の主要な施設が集約された本施設は、船舶の安全航行を支えた施設群として近代海上交通史上、価値が高い。		
国	重要文化財（絵画）	絹本著色仏涅槃図	けんぽんちゃくしょくぶつねはんず	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	明45.2.8	絹本，八相涅槃図	縦152.4cm，横140.7cm	涅槃図は，釈迦の入滅つまり涅槃の態様を描いた図で，涅槃会（ねはんえ）の本尊として用いられるため，遺品は11世紀からあり鳥獣の数が次第に増加しその形状も横長構図から縦長構図に推移している。 本品は，ほぼ正方形の形状をした鎌倉時代，13世紀中頃の作である。元は大阪の神峯山寺に伝来したとされている。 八相涅槃図と称され，釈尊のこの世における主要な事跡八種を入涅槃を中心に構成した図である。浄土寺本（重文）では八相を別の区画の中に描いているが，この図では区画を設けず配置しており，明恵上人作の涅槃講式の説と一致し，宋，元の涅槃図の影響を受けて成立したと推定される。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（絵画）	紙本著色三十六歌仙切 佐竹家伝来	しほんちゃくしょくさんじゅうろっかせんぎれ	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.5.6	紙本，幅仕立	縦35.5㎝，横78.2㎝。	鎌倉時代（1192～1332）に流行した歌仙絵巻の一部分である。元来上下2巻であったが，京都賀茂神社から佐竹家に移管された際，1人ずつ切りはなし掛幅仕立とした。類品中でも最も傑出するもので，書は京極良経（きょうごくよりつね），絵は藤原信実（ふじわらののぶざね）の筆になると伝えられる。 本寺所蔵の貫之（つらゆき）の書部分は，室町時代（1333～1572）に補筆されたものである。 三十六歌仙とは，平安時代中頃（10世紀末）に藤原公任が選んだとされる代表的歌人36人のことである。 ※藤原信実（1177～？）…鎌倉時代の絵師・歌人 ※紀貫之（868?～945?）…平安時代初期の歌人		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（絵画）	絹本著色千手千眼観音像	けんぽんちゃくしょくせんじゅせんがんかんのんぞう	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭35.6.9	絹本著色	縦124㎝，横54㎝	鎌倉時代（1192～1332）の作。千手観音の図像のほとんど唯一といってよい実例で，正確に千臂（ひ）千眼が描かれている。おそらく鎌倉時代初期，13世紀に日本列島にもたらされた中国の宋代の原本を，忠実に模写したものであろうかと思われる。筆法の厳格さと構図の巧妙さは類例のないすぐれた作品と言える。 千手観音の千とは無量と円満の意味であり，その造像にあたっては，十八や十四に略して造られ，千手の実例は唐招提寺に見られるのみである。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（絵画）	絹本著色仏涅槃図 左右下の各縁に涅槃の諸相がある 附　旧軸木　1本 文永十一年粉河寺僧随覚房云々の記がある	けんぽんちゃくしょくぶつねはんず	1幅	尾道市東久保町	昭43.4.25		縦174.5cm，横133.5cm	鎌倉時代，文永11年（1274）製作。 本図のように涅槃に関係の深い多くの説話を図のまわりに廻らしている例は少ない。図の左側八段には主として入涅槃前の事蹟を，右側には涅槃後摩耶夫人に対する再生説法の場面を中心に描いている。 本図は古典的涅槃図の構成を脱して次第に数多くの禽獣を描きこむ過程を示している点にも注目され，人物描写にも新渡（しんと）の宋画の暈（ぼかし）どりを用いている。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
国	重要文化財（絵画）	紙本白描遊行上人絵 巻第二，第五，第六，第八	しほんはくびょうゆぎょうしょうにんえ	4巻	尾道市西久保町	昭53.6.15	巻第二／本紙々継24枚，詞4段，絵4段 巻第五／ 巻第六／本紙々継19枚，詞4段，絵3段 巻第六／本紙々継17枚，詞2段，絵1段 巻第八／本紙々継24枚，詞3段，絵3段	縦30.2cm 長さ／巻第二1,070.5cm，第五920.0cm，第六861.5cm，第八1,202.0cm	南北朝時代（1333～1392）の頃の作と考えられる。 時宗の一遍関係の伝記絵巻は，聖戒編の「一遍聖絵十二巻」と宗俊編「遊行上人絵十巻」の二系統が伝わっているが，本品は一遍と他阿の伝記をあらわした宗俊系統の，全巻白描の画法による珍しい絵巻である。特に，技法として新しく渡来した水彩画の手法と大和絵との融合をはかった画風は独特である。 ※白描…絵の技法の一つ。墨線と墨の濃淡で表現する。		
国	重要文化財（絵画）	絹本著色両界曼荼羅図 附　旧軸木　2本 文保元年二月益円の銘がある	けんぽんちゃくしょくりょうかいまんだらず	2幅	尾道市東久保町	昭53.6.15	胎蔵界／画絹四副一鋪 金剛界／画絹四副半一鋪	胎蔵界／縦263.0cm，横183.5cm 金剛界／縦251.0cm，横185.0cm 旧軸木／軸長各184.0cm，軸径各5.0cm	鎌倉時代の文保元年（1317）の作。 両界曼荼羅図で，描写は伝統的な手法により，重厚な筆致と鮮やかな彩色で，きわめて精緻に描かれている。諸尊像には補筆や補彩がなく，描表具や八双金具は当初のもので，軸木に墨書で「文保元年丁巳二月四日」の銘がある。 当時の懸曼荼羅の原形を伝える貴重な資料である。鎌倉時代末期の仏画で年紀のあるものが少ないことから考えると，制作年代が明確であり，基準作例としての価値は大きい。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
国	重要文化財（彫刻）	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう	1躯	尾道市東久保町	明32.8.1	檜材，一木造	像高1.6m	浄土寺本堂の本尊で，定証起請文（じょうしょうきしょうもん）にある「本尊聖徳太子御作等身皆金色十一面観音像」と記されているのは，おそらく本像のことであろう。 檜材のこの像は，右手は施無畏（せむい）の印を，左手に開敷蓮華をさした花瓶（後補）をもつ。面相は豊満で，体躯は肥大充実し，刀法も鋭く，全身を金色の寂光に包まれた端厳な尊容の像である。平安時代も初期に近い頃（9世紀）のすぐれた作である。		33年に一度開帳 関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）

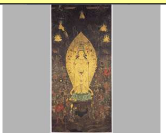
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(彫刻)	木造釈迦如来立像(伝安阿弥作)	もくぞうしゃかにょらいりゅうぞう	1躯	尾道市西久保町	明32.8.1	寄木造，素木，玉眼	像高78cm	西國寺客殿脇間に安置されている仏像で，小柄ながらも秀麗な尊容に，よく調和のとれた彫りの深い流れるような衣文のヒダにも，鎌倉時代(1192～1332)の安阿弥流の特色がうかがわれる。 寺伝によると，本像は快慶の作と言い，かっては「うしとら坂」の釈迦堂の本尊であったが，御堂の炎上後，西國寺に安置することになったという。		
国	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしにょらいざぞう	1躯	尾道市西久保町	明32.8.1	一木造	像高91cm，膝張り71cm	平安時代も初期に近い時期(9世紀)の秀作である。西國寺金堂の内陣須弥壇に安置されている本尊仏で，古来秘仏として伝来してきたものである。優麗ななかにも森厳にして荘重な趣をたたえた，重量感のある仏像で，螺髪(らほつ)は切付けで，彩色のない素木の古い高雅さが感ぜられる。 寺伝によると，讃岐善通寺(ぜんつうじ)から迎えた弘法大師の「七仏薬師」のひとつと言われる。		
国	重要文化財(彫刻)	木造千手観音立像	もくぞうせんじゅかんのんりゅうぞう	1躯	尾道市東土堂町	明32.8.1	一木造	像高106cm	平安時代(794～1191)の作。 千手観音で真数千手のものは数点しかなく，ほとんどが合掌手，宝鉢手の他に両脇に十九本の脇手がある四十二臂(ひ)像がごく一般的である。本像も四十二臂像で，彩色は剥落しているが，かえって木目が美しく効果的にあらわれている。 寺伝では行基菩薩作と言い，向島余崎城主で村上水軍の将鳥居資長が寄進したものと伝え，その念持仏として船中に護持し，風浪を凌いだので，「浪文観音」の俗称もある。		
国	重要文化財(彫刻)	木造聖徳太子立像(開山堂安置) 乾元二年ノ銘アリ	もくぞうしょうとくたいしりゅうぞう	1幀	尾道市東久保町	大1.9.3	寄木造，玉眼，彩色，髪をみづらに結い，柄香炉を持つ。	像高94cm	鎌倉時代の乾元2年(1303)，沙弥定証(じょうしょう)が息子の死後にその菩提を弔うために作らせた像といわれる。京の院派の仏師・院憲が作った。 「孝養像」と称されるもので，玉眼で彩色され，髪はみづらを結い，両手で柄香炉(えごうろ)を持った姿である。胎内頭部に「乾元二年法印院憲作」という墨書がある。定証起請文(じょうしょうきしょうもん)に「聖徳太子十六歳御躰，京都仏師印憲作」というのは本像と思われる。 文献と銘文が照応する遺物は珍しい。鎌倉時代末期(14世紀前半)院派の佳作である。		関連施設：浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(彫刻)	木造聖徳太子立像(開山堂安置)	もくぞうしょうとくたいしりゅうぞう	1躯	尾道市東久保町	大1.9.3	寄木造，玉眼，彩色，左手に柄香炉，右手に笏を持つ。	像高1.35m	南北朝時代，暦応2年(1339)の作で，胎内に墨書銘がある。 「摂政(せっしょう)像」と称せられるもので，玉眼で彩色されている。摂政像は必ず笏(しゃく)を両手で持っているのであるが，本像は左手に柄香炉(えごうろ)，右手に笏を持っており，摂政像の影響をうけた孝養像の一変形と思われ，同様のものは南北朝時代(1333～1392)前後からその例があらわれる。 同種の太子像中の秀作である。		関連施設：浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(彫刻)	木造釈迦如来立像	もくぞうしゃかにょらいりゅうぞう	1躯	尾道市瀬戸田町瀬戸田	大4.3.26	本体・台座ともカヤの一木造	像高135cm	平安時代初期，9世紀の作と思われる作品で，当時の造像によく見られる本体と台座を榧(かや)の一木から彫り出した，重厚森厳な仏像である，もと伊勢神宮の神宮寺にあったものという。 釈迦牟尼(むに)とは「釈迦族の聖者」の意味で，苦行の後に悟りを得て慈悲と知慧(ちえ)により衆生(しゅじょう)を済度(さいど)した仏教の祖である。その釈尊は久遠常住(くおんじょうじゅう)の仏である釈迦如来として多くの経典の教主とされており，日本においても仏教伝来以後多くの造像が行われた。		関連施設：耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	尾道市瀬戸田町御寺	昭3.8.17	寄木造，漆箔，玉眼	像高83cm	真言宗光明坊の本尊で，漆箔で玉眼入り。下品上生の印を結ぶこの仏像は，鎌倉時代(1192～1332)の作ではあるが，面相は丸味がありふっくらとしており，衣文の線もやわらかく，平安風の匂いを感ぜさせる秀作である。寺伝によると行基菩薩の作であるという。		
国	重要文化財(彫刻)	木造浄土曼荼羅刻出龕	もくぞうじょうどまんだらこくしゅつがん	1基	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	檀木を用いて浄土曼荼羅を精巧に彫り出した小形の厨子	縦13.5cm，横14cm，奥行4cm	龕(がん)とは，本来は塔の下の室という意味で，厨子状に刳(く)られたくぼみの中に納められた像を龕像という。小型のものは諸国を巡る僧侶が携帯していた例が多い。 この龕は檀木を用いて浄土曼荼羅を精巧に彫り出した小形の厨子である。一木から宝楼閣や七宝の池などに，弥陀三尊をはじめ，十大弟子，二十五菩薩，四天，二力士など五十躯の諸尊や鳳首の舟などを克明に彫り起して極楽浄土を表現しており，すぐれた技法による精巧で構成の巧みな作品である。 平安時代，12世紀の作。厨子の裏面に「高野山無量寿院昶遍」の朱漆銘がある。		関連施設：耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(彫刻)	木造聖徳太子立像(南無仏太子像) 頭部内面に建武五年十月廿四日院勢作ノ銘アリ	もくぞうしょうとくたいしりゅうぞう(なむたいしぞう)	1躯	尾道市東久保町	昭11.9.18	寄木造，玉眼，彩色	像高68cm	南北朝時代，建武5年(1337)の作。胎内頭部に「建武五年十月二十四日院勢作」の墨書銘がある。 「南無仏のお姿」と称されるもので，玉眼入りの彩色された像である。三歳の尊像と言われ，上半身は裸形で下半身に緋の裳を着け合掌する姿である。同じ胎内から出た三尊仏の印仏(いんぶつ)には，本寺重修に尽力した道蓮，道性の名も見られ，本寺と太子信仰の関係も察せられる貴重な作品である。なお，作者の院勢は，孝養像の作者院憲と同じく京都院派の著名な仏師である。		関連施設：浄土寺宝物館(0848-37-2361)

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来立像 像内二藤原行光ノ願文及名号等ヲ納ム	もくぞうあみだにょらいりゅうぞう	1躯	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭14.9.8	寄木造，漆箔	像高60cm	鎌倉時代，天福元年（1233）の作。小像ではあるが，漆箔の上に精緻な截金（きりがね）を施した秀麗な安阿弥流のおだやかな作品で，胎内の空洞を金箔ではりつめた珍しい例の仏像である。 その胎内には承久元年（1219）に卒した藤原行光の自筆文書と千字の名号及び願文が納入されていた。願文には天福元年の年紀があり，木像は，行光の十五回忌にその冥福を祈るために造顕されたものであることがわかる。 行光は源頼朝，義朝の縁につながる人物で，民部丞，政所執事，信濃守などの要職にあった。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（彫刻）	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう	1躯	尾道市梶山田甲	昭24.2.18	一木造，上下二段の背刳りがある，素木	像高190cm	平安時代（794～1191）の作。摩訶衍(まかえん)寺の本尊で，冠帯は欠いているが天冠台を彫り出し，彫眼の像は，条帛（じょうはく）をつけ腕釧（わんせん）を彫出してある。すこぶる重量感のある堂々とした像であるが，天衣や裳の彫は比較的浅い。背面の胸背部と腕部に内刳（うちぐり）があるが，その納入品についての寺伝はない。この像は，たびたび災禍にあったためか，彩色はほとんど剥落し，化仏，手足や天衣の先端は欠失し，現存のそれらは後補である。		
国	重要文化財（彫刻）	木造仏涅槃像	もくぞうぶつねはんぞう	1躯	尾道市御調町市	昭24.2.18	寄木造，漆箔，玉眼	像高150cm	鎌倉時代（1192～1332）の作。 涅槃とは，一切煩悩の繋縛を脱して迷界に再生する業因を滅却した境地と言われ，釈迦の死の時を言う。釈迦が沙羅双樹（さらそうじゅ）の下で右脇を下にして横臥し，その周囲をとりまいて，釈迦の弟子の僧達や俗人から鬼人，動物が悲嘆し慟哭している有様を描いた涅槃図は多いが，技術的にむつかしい彫刻は少ない。 本像は玉眼入り漆箔の等身大の数少ない涅槃像のひとつである。「寝釈迦」とも俗称されるこの像の現存する最古のものは，法隆寺五重塔の初重四面の塑像群で白鳳時代（8世紀），奈良明日香村の岡寺のものは天平時代（8世紀中葉），他には本像と同じ鎌倉時代のものが香川県の観音寺にある。		
国	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来坐像 像内に巧匠安阿弥陀仏，伊豆御山常行常御仏，建仁元年十月口日の銘がある	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭38.2.14	寄木造，漆箔，裳懸座にのる	像高74.0cm	漆箔で裳懸座（もかけざ）に坐るこの像は，銘文にあるようにもとは伊豆山権現（走湯山，神奈川県）常行堂の本尊であったもので，鎌倉時代，建仁元年（1201）快慶（安阿弥，あんなみ）の若い時代の作品である。形の整った安阿弥風のおだやかな作風のもので，宝冠をつけた，阿弥陀像としては珍しい形式の仏像である。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（彫刻）	木造観音菩薩立像 附 木造観音菩薩立像 1躯	もくぞうかんのんぼさつりゅうぞう	1躯	尾道市向東町	昭52.6.11	一木造	像高178.0cm	等身の一木彫像で，肩幅広く量感豊かな体躯や翻波（ほんぱ）風の衣文には平安時代初期（9世紀）の余風を伝えてはいるが，総体におだやかさが顕著になっており，10世紀の製作と考えられる。堂々とした風格があり，保存も比較的良く，備南地方の平安古像を代表するすぐれた作品である。 付(つけたり)の菩薩像は本品と一緒に伝世したものであるが，作柄に地方風が強く，この地方の造像傾向の変遷の一端をうかがう遺作として価値がある。11世紀の作と考えられる。		
国	重要文化財（工芸品）	銅製五鈷鈴（伝僧空海将来）	どうせいごこれい	1口	尾道市西久保町	明32.8.1	銅製	高さ22cm，口径5.5cm	五鈷鈴は金剛鈴と総称されるものの一つで，密教修法の時，諸尊を驚覚歓喜させ，眠っている仏心を呼びさますために用いられる。本品は鈴身に仏像を鋳出した五鈷仏像鈴で，その仏像の種類によって梵天帝釈四天鈴（ぼんてんたいしゃくしてんれい）と称されるものである。把柄（つかえ）は蓮華をかたどり，五鈷は獅子の爪の形をした精巧な細工の逸品で，寺伝に弘法大師将来という晩唐期（9世紀頃）の作品である。		
国	重要文化財（工芸品）	錫杖	しゃくじょう	1柄	尾道市西久保町	明44.4.17	銅製	長さ79.6cm	錫杖は有声杖とも言われ，頭部の輪形に遊鐶（ゆうかん）を通し，これを揺って音を出すものである。錫杖の渡来は仏教初伝の頃と言われ，長さは等身丈で，字の如く杖として用いられていたが，後には柄を短くして手錫杖とよばれ，杖としてではなく法要の時の梵音具として用いられるようになった。この錫杖も「手錫杖」で，双竜の頭に蓮華をさした花瓶をおき，竜尾で錫杖の輪をかたどり，頂上に定印（じょういん）の三尊仏を配し，朱色の短い杖をつけた精巧な品である。寺伝では弘法大師将来という晩唐（9世紀ごろ）の作である。		
国	重要文化財（工芸品）	唐花鴛鴦八稜鏡	とうかえんおうはちりょうきょう	1面	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭17.12.22		直径29.5cm	この鏡は，伊勢神宮の神官の系譜の家に伝承されたもので，花芯座とも言うべき座が紐の周囲にあり，内外区の界圏もあるが，内外の文様は同一系統であるので自由に連絡している。鴛鴦（雄雌のおしどり）と唐花は相対しており，その趣は優雅流麗で，鋳技（ちゅうぎ）も非常にすぐれており，保存も完好な鎌倉時代（1192～1332）における和鏡の逸品である。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（工芸品）	孔雀倉戈金経箱 蓋裏に「延祐二年棟梁禅正明慶寺前宋家造」外底に「延文三年六月日」の銘がある	くじゃくそうきんきょうばこ	1合	尾道市東久保町	昭30.2.2		縦40cm，横22cm，高さ25cm	中国南部の杭州で，元の延祐2年（1315）に製作された箱である。その後，日本に輸入され，南北朝時代の延文3年（1358）には浄土寺で最勝王経の箱とされた。 内部に朱漆，外面に黒漆をほどこし，孔雀文が彫られている。蓋に「首」，身に「性」の文字が彫られ，蓋裏に「延祐二年云々」の黒漆銘，外底に「備後国尾道云々」の朱漆銘がある。 元からの舶来品で，製作年代，製作地，製作者が明らかな中国漆芸史上の貴重な遺品で，製作年の明記された[84a1]金（日本では沈金と呼ばれる技術）作品としては最古のものである。 光明坊（豊田郡瀬戸田町）のものと姉妹品で，大きさ及び銘文はほとんど同じである。また，浄土寺の孔雀文沈金経箱とは大きさは違うが，意匠などはほとんど同一である。		奈良国立博物館に寄託 関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(工芸品)	孔雀倉戈金経箱 蓋裏に「延祐二年棟梁禅正杭州油局橋金家造」内底に「延祐二年棟梁禅正」の銘がある	くじゃくそうきんきょうばこ	1合	尾道市瀬戸田町御寺	昭30.2.2		高25.2cm，縦39.8cm，横22.3cm	浄土寺(尾道市)旧蔵のもので，浄土寺にある「孔雀文沈金経箱」(重文)「孔雀[84a1]金経箱」(重文)の二合とは姉妹品で，特に後者とは大きさ及び銘文はほとんど同じである。 黒漆塗の面に孔雀と宝相華(ほうそうげ)の文様をきわめて精緻に[84a1]金彫りした精巧な舶載の工芸品で，刀技は単純鋭利，形態は素雅な元時代(1271～1368)の漆工の名品である。延祐2年(1315)銘がある。		東京国立博物館に寄託
国	重要文化財(工芸品)	銅水瓶	どうすいびょう	1口	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭34.6.27		高さ27.5cm，胴径13.7cm。	水瓶は，もともとは僧侶が仏道修行に必要とする用具の一つであったが，供養具として仏前の献水に用いられるようになったものである。 この水瓶は，獅子のつまみのある蓋がついた鎌倉時代(1192～1332)の作で，志貴山形水瓶と呼ばれる形のものである。やや太首で，肩に水平の面取りを作り，長い注口と把手をつけるという形をしている。この形態の水瓶は法会の時の湯(とう)瓶に用いられることもある。		関連施設：耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(工芸品)	金銅五鈷鈴 附　金銅五鈷杵　1口 金銅金剛盤　1面	こんどうごこれい	1口	尾道市西久保町	昭36.2.17	金銅製，鋳造品	五鈷鈴／高さ21.5cm，口径8.8cm 五鈷杵／長さ19.6cm 金剛盤／長径26.1cm	この五鈷鈴は，中帯に輪宝文を，肩帯に独鈷，口帯に三鈷を鋳出している珍しい作で，精緻な細工を施した形姿の美しい鈴である。五鈷杵・金剛盤とともに一具として伝存する鎌倉時代初期(12世紀末～13世紀初め)の製作である。寺伝によると，この一具は白河法皇から西国寺中興の僧慶ばんに下賜されたものという。		
国	重要文化財(工芸品)	孔雀文沈金経箱	くじゃくもんちんきんきょうばこ	1合	尾道市東久保町	昭44.6.20		縦54cm，横36cm，高さ29cm	尾道浄土寺に伝わる元の時代(1271～1368)の作品で，延祐2年(1315)銘の浄土寺所有孔雀[84a1]金(くじゃくそうきん)経箱や光明坊所有孔雀[84a1]金経箱と意匠がほとんど同じことから，同時代に製作されたと思われる。 印籠蓋造りで，蓋表には黒漆塗を施し，身の長側面に双孔雀，短側面には双尾長鳥文，蓋の側面には唐花文をそれぞれ沈金で埋めつくして，蓋の正面に「天」，身の四隅に「性・静・情・逸」の文字を薬研彫にしている。蓋と身の内部は朱漆である。		関連施設：浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書観世音法楽和歌 建武三年五月五日尊氏証判アリ	しほんぼくしょかんぜおんほうらくわか	1巻	尾道市東久保町	明37.8.29	宝相華文紺表紙，紺紙金泥		足利尊氏は建武政府に反して間もなく九州に敗走したが，その途中浄土寺に船を寄せて本尊の観世音菩薩に戦運挽回の祈願をしている。その後数ヵ月で勢を回復した足利尊氏が上洛の途中の建武3年(1336)5月5日，再び浄土寺観音堂に参籠した時，尊氏と弟の直義等6人が本尊十一面観音菩薩の前で，観音賛仰の和歌33首を詠じて宝前に供えたものである。この中に尊氏の詠歌は7首で，巻頭の花押は尊氏の証判である。		関連施設：浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書定証起請文 嘉元四年トアリ 附　同案文(残簡)1通	しほんぼくしょじょうしょうきしょうもん	1巻	尾道市東久保町	明43.4.20	巻初は金字銀字の文書，紺紙金銀泥	縦27.5cm，横671cm	鎌倉時代の嘉元4年(1306)，真言律宗の西大寺叡尊(1201～1290)の弟子定証が浄土寺の伽藍を再建した時の自筆起請文である。 定証以前の浄土寺は紀州高野山に所属し，尾道の人光阿弥陀仏の外護によって本堂・五重塔・多宝塔・地蔵堂，鐘楼などが建てられていたが，専属の僧侶もおらず閑寂としていた。浄土寺が定証に寄進されると彼の勧進によって更に金堂・食堂・僧房・厨舎が造営され，広範な地域の人々の信仰を集める活気のある寺となったことが記されている。 文書は更に続き，嘉元元年(1303)の舎堂落成のほか，嘉元4年に行われた盛大な落慶供養の次第も詳細に記され，その文書中に見える定証の朱色の手印があざやかである。当時の盛観を知る資料である。		関連施設：浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書浄土寺文書 寺領注文建武四年十月日トアリ1通，尊氏寄進状外9通	しほんぼくしょじょうどじもんじょ	1幅	尾道市東久保町	明43.4.20	紙本墨書	縦27.6cm，横1180cm	浄土寺に所蔵されている中世文書115通のうちの11通である。浄土寺領因島地頭方年貢注文や足利尊氏寄進状，足利義教御判御教書など，南北朝時代(14世紀)から室町時代前期(15世紀前半)の古文書の一部である。 年貢注文は，浄土寺領因島(因島市)にある中庄・重井庄・三津庄地頭方の建武4年(1337)の年貢数量の注進状で，文中の年貢の中に千六百六十五俵三斗五升六合(八百三十二石八斗六升五合)にのぼる多量の塩がみられる点が注目される。尊氏寄進状は浄土寺におかれた備後国利生塔に対し，備後得良郷(賀茂郡大和町)の地頭職を寄進するものである。 なお，後醍醐天皇綸旨(りんじ)をはじめとする残る104通は県指定重要文化財である。		関連施設：浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紺紙金銀泥法華経巻第七 天暦三年ノ奥書アリ	こんしきんぎんでいほけきょう	1巻	尾道市東久保町	明43.4.20	紙本	縦34.2cm，横92.4cm	平安時代中期(10世紀)の装飾経。法華経の巻第七の巻初は金字の行と銀字の行を1行ごとに交互に記し，後段は金泥(きんでい)書きにしたものである。巻末に，天暦3年(949)6月22日に紀則常と女性の物部氏が壇主として奉仕した旨の奥書があり，平安時代中期における金銀交書(こうしょ)経として注目される経巻である。 軸端は，撥型(ばちがた)で，鍍金魚々子(ときんななこ)地宝相華文である。		関連施設：浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経巻第九十九 「薬師寺印」朱印竝ニ「薬師寺金堂」ノ黒印アリ	しほんぼくしょだいはんにゃきょう	1巻	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	紙本墨書	縦32.1cm，横35.8cm	「魚養経(ぎょようきょう)」と呼ばれる古くから朝野宿弥魚養(うおかや)発願経と伝えられるものの一巻で，奈良時代(8世紀)の代表的な写経のひとつである。魚養は奈良時代末から平安時代初期(8世紀終り～9世紀初め)にかけての人物で，医者であり能書家として知られる。 もとは奈良薬師寺に伝わったもので，天平宝字9年から宝亀元年(765～770)に写されたと言われる。		関連施設：耕三寺博物館(0845-27-0800)

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（典籍）	紙本墨書正親町天皇宸翰御消息（青蓮院宛）	しほんぼくしょおおぎまちてんのうしんかんみしょうそく	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	綴葉装，平仮名	縦14.4cm，横124cm	戦国時代から安土桃山時代の天皇，正親町天皇（在位1557～1586）が京都の青蓮院（しょうれんいん）門跡（もんぜき）に宛てた書状である。新年のお祝いに対して返礼を述べたもので，ちらし書きで記されている。 正親町天皇は，天皇位を継いだ後3年を経て即位礼をあげたことで知られる。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（典籍）	紙本墨書陽光院御筆御消息（五月十五日青蓮院宛）	しほんぼくしょようこういんおんひつみしょうそく	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	紙本墨書，折本	26.0×10.8cm（第1巻表紙）	陽光院は正親町天皇の第一皇子・誠仁（さねひと）親王の死後に追贈された尊号である。織田信長によって次代の天皇候補とされ，信長の死後も即位真近かと見られていたが，天正14年（1586）に病没した。 天正13年（1585），誠仁親王が青蓮院尊朝親王にあてた書状で，大和の多武峯（とうのみね，奈良県）が勅願所であることから，天下が静まったこの時に内大臣・豊臣秀吉の尽力を依頼するよう求めている。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（典籍）	紙本墨書別異弘願性戒鈔	しほんぼくしょべついぐがんしょうかいしょう	1帖	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	表紙は宝相華唐草文，見返し絵。軸は鍍金撥形。	縦25.8cm，全長85～148cm	鎌倉時代（1192～1332年）の天台座主（ざす）・慈円（1155～1225年）が筆者と伝えられる書籍。京都・青蓮院に伝来した鎌倉時代中期の浄土宗系統の注釈書の一種である。 綴葉（でっちょう）装で，別異弘願すなわち弥陀四十八願について往生礼讃及び観経疏の注釈を加えたもので，平仮名書きであることは，鎌倉時代の念仏思想の一端を示す好資料である。 ※慈円…藤原忠通の子。歌人であり,史書「愚管抄」の著者として知られる。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（典籍）	貫之家歌合	つらゆきけうたあわせ	1巻	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭36.2.17	紙本墨書	縦28.3cm，全長9.22cm，	歌合(うたあわせ)とは，平安時代初期（9世紀前半）以来宮廷や貴族の間で流行した遊戯で，左右に分れた歌人がその詠んだ歌左右一首ずつを組み合わせ，優劣を争いその多少によって勝負を競う遊びである。 この一巻は，平安時代後期（11世紀後半～12世紀），藤原忠通の命で仁和年間から大治年間（885～1131）に行われた歌合を類別聚集した「類聚歌合」20巻本の巻十七の一部である。筆者の確証はないが，藤原俊忠筆と伝えられる「二条切（にじょうぎれ）」の一つである。 天慶2年（939）周防国衙で催された紀貫之（きのつらゆき）家の歌合の歌六番十二首を収めた断簡で，和歌資料として貴重なものである。 ※紀貫之（868?～945?）…平安時代初期の歌人		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	重要文化財（考古資料）	日向国児湯郡持田古墳出土品 画文帯神獣鏡1面，変形四獣鏡1面	ひゅうがのくにこゆぐんもちだこふんしゅつどひん がもんたいしんじゅうきょう へんけいしじゅうきょう	2面	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭37.6.21	画文帯神獣鏡（中国鏡，平縁，四神四獣鏡） 変形四獣鏡（倭製）	画文帯神獣鏡／直径21cm 変形四獣鏡／直径20cm	持田古墳群第25号墳（宮崎県児湯郡高鍋町持田）出土の青銅鏡。 画文帯神獣鏡は，中国六朝（りくちょう）時代（3～7世紀はじめ）の鋳造と思われる平縁の四神四獣鏡で，紐（ちゅう）をとりまいて有節重弧文（ゆうせつじゅうこもん）があり，その内区に神像龍虎を大きくあらわし，それらの間に随従する数多くの神人禽獣（きんじゅう）が鋳出されている。内区には半円方形帯，外区内側に禽獣文帯を，外側には菱形文帯をめぐらしている。銘文がある。 変形四獣鏡は，倭製鏡とされ，内区の四獣頭部には叉角（しゃかく）が認められ，外縁に「火竟」の二文字を鏤刻（るこく）している。 ※持田古墳群…5～6世紀の古墳群		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	名勝	浄土寺庭園	じょうどじていえん		尾道市東久保町	昭52.5.7			浄土寺境内の西北部，方丈（ほうじょう）と庫裡（くり）とに東南を囲われた築山泉水（せんすい）庭である。山畔を利用して築山を構え，前面白砂敷との間に細い池を設ける。築山一帯に多数の石を配し，中央滝の石組には特に意匠を凝らしてある。方丈と書院から飛石を打ち並べ，築山の両側から築山背後の茶室・露滴庵（ろてきあん）の露地に続いている。ソテツやツツジ等の刈込物が多い。 寺蔵の古絵図によって本庭は文化3年（1806）長谷川千柳によって作庭され，いわゆる「行の築庭」の様式によったものであることが知られる。また，この絵図によって作庭当初の地割と石組が良く保存されていることが明らかである。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
県	重要文化財（建造物）	西国寺仁王門	さいこくじにおうもん	1棟	尾道市西久保町	昭44.4.28	三間一戸，入母屋造，本瓦葺。		江戸時代の慶安元年(1648)の建立の仁王門である。県内で数少ない楼門形式の仁王門で，建立年代からは比較的古い様式でまとめられた，格調の高い建物である。 元文5年（1740）の棟札があり，その時の修復で，尾道の豪商・泉屋新助を施主に，大工を藤原五良兵衛として，大工194人屋根葺き職人21人，人夫191人，合力人夫212人が従事し，瓦2800枚を追加したことが知られる。		
県	重要文化財（絵画）	絹本著色弘法大師絵伝	けんぽんちゃくしょくこうぼうだいしえでん	8幅	尾道市東久保町	昭30.3.30	絹本著色	縦152cm，横96cm	室町時代中期（15世紀）に製作された，弘法大師の一生を説く絵伝である。この類の絵伝は各地に多く残されているが，この絵は各部分とも力強い筆致のみごとな絵伝である。 第一軸は「大師誕生から久米寺感経」まで，第二軸は「入唐から清水写書」まで，第三軸は「恵果拝謁から三鈷抜擲」，第四軸には「応天文投筆から二荒日光まで」，第五軸には「東寺勅賜から二間修法」まで，第六軸には「高野尋入から入定御廟拝見」まで，第七軸と第八軸は2幅１組でストーリーがつくられ「陸博参詣」と第八軸「法皇行幸」が描かれている。また，図の下から上へストーリーが展開している。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
県	重要文化財（絵画）	絹本著色弘法大師像	けんぽんちょくしょくこうぼうだいしぞう	1幅	尾道市西久保町	昭30.3.30	絹本著色	縦78cm，横39cm	高野山の真如親王筆の御影の系統に属する作品で，小幅ながらその幅下に高野壇上伽藍の景を描いているのは珍しく，その布置から見て天授3年（1377）の一部伽藍の焼失以前の情景を描いたものと思われ，それから判断して鎌倉時代末期（14世紀前半）の作かと考えられる。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(絵画)	絹本著色地蔵菩薩像	けんぽんちょくしょくじぞうぼさつぞう	1幅	尾道市西久保町	昭30.3.30	絹本著色	縦110cm，横55cm	地蔵菩薩は，六道の衆生を救う菩薩と言われ，わけても地獄における救済の力を中心として信仰され，わが国でも平安時代中期から鎌倉時代（1185～1332）にかけて信仰が盛んになり，庶民生活と結びつき，その造像，絵画は多い。 本品も，そのような室町時代（1333～1572）に描かれたと思われる作品で，左足を下げ，右足を立膝にして岩座に坐す。右手を頬にそえ，左手には錫杖（しゃくじょう）を持ち，左右に掌善童子，掌悪童子の二童子を配した延命地蔵菩薩の像である。彩色は截金（きりがね）・金泥・緑青や朱を用いて精緻に描いた色彩感の豊かな画像である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本著色法然上人像	けんぽんちゃくしょくほうねんしょうにんぞう	1幅	尾道市東土堂町	昭37.7.20	絹本著色　軸装	縦69cm，横42cm	浄土宗の光明寺に古くから伝わる画像で，黒の法衣をまとい高麗縁（こうらいべり）の畳に坐り，数珠を手にし頬骨を高く頭は二段に描かれたいわゆる法然頭である。法然の画像としてはごく古いもので，寺伝によると円光大師（法然）自筆の尊影というが，画讃に建暦口年（1379～1381）正月六日とあり，室町時代初期（14世紀）の作であることが知られる。		
県	重要文化財(絵画)	絵馬（餞鳥毛〇毛） ※餞の俗字，〇は馬ヘンに緑のツクリ	えま（そうもうりょくもう）	2面	尾道市東久保町	昭41.4.28		縦158cm，横176cm	天正5年（1577）播州明石郡船上（ふなげ）（現在の兵庫県明石市船上町）の石井与次郎兵衛尉が奉納した絵馬。 2枚1対の大形の絵馬で，細い縁に杉材の薄板を縦に貼り合わせ，その表面に紙をはり，首をあげた[84a0]毛の馬と首をふした姿の[84a1]毛の馬を一匹ずつ墨書淡彩で描いたものである。いずれも杭に綱でつながれており，鞍はつけていない筆力雄健な絵である。 奉納者の石井与次郎兵衛は，後に豊臣政権の水軍の一員としてその名がみえる人物であり，瀬戸内の海上交易に従事していたと推測される。安土桃山時代（1573～1602）の尾道と瀬戸内の海上交通の実態をうかがわせる資料となっている。		関連施設：浄土寺宝物館 （0848-37-2361）
県	重要文化財(絵画)	光明本尊	こうみょうほんぞん	1幅	尾道市久保町	昭41.4.28	絹本著色，軸装	縦149cm，横91cm	光明本尊は初期真宗教団の礼拝の対象として使用されたもので，古くは三幅一対であったが，その後一幅のものが一般的となった。 本品は南北朝時代（1333～1392）のものと考えられ，本願寺覚如の子・存覚が自筆の画像を宝田院とともに与えたと伝える。 中央に「南無不可思議光如来」の九字の尊号を配し，左下隅に「帰命尽十方無量光如来」の十字尊号，右下隅に「南無阿弥陀仏」の六字尊号を配し，釈迦，弥陀の二尊像を描いている。そして右に天竺（てんじく）・震旦（しんたん）の十高僧を，左に和朝の像を描き，その下部に聖徳大師像を加えている。光明本尊は東日本には多いが，西日本には少なく貴重な資料である。 福善寺は天正元年（1573）行栄法師が開いた浄土真宗寺院。		
県	重要文化財(絵画)	絹本著色春日曼荼羅	けんぽんちゃくしょくかすがまんだら	1幅	尾道市西久保町	昭44.4.28	絹本著色，軸装	縦99cm，横36.4cm	曼荼羅には，儀軌（ぎき）によって密教の根本理念を図式化したものと，特殊な尊像を中心にその曼荼羅が効果ありと信じられた加持祈祷の際に奉懸（ほうけん）される別尊曼荼羅がある。 本品は「春日鹿曼荼羅」と称される別尊曼荼羅のひとつで，上方に遠山を描き，中央に本地仏を下方に春日大社の御使いと言われる神鹿の立つ姿を描いている。破損も少なく保存も良好な室町時代（1333～1572）の作である。		
県	重要文化財(絵画)	刺繍阿弥陀三尊種子曼荼羅	ししゅうしゃかさんぞんしゅじまんだら	1幅	尾道市西久保町	昭44.4.28	絹糸刺繍，軸装	縦73cm，横27.5cm	著色絹糸で上方に天蓋を刺繍し，中央の三個の円光の中の蓮座に，毛髪で刺繍した種字がのる。その下には三脚の円机上に火舎，花瓶を刺繍して供え，三尊を祀る形をあらわしている。蓮座蓮弁の糸は，暈繝（うんかん）式の色調であらわし美麗である。表装中廻しの裂の上方には散華，下方には蓮池を織った豪華なもので，刺繍技工を知るうえに貴重である。室町時代（1333～1572）の作。		
県	重要文化財(絵画)	絹本淡彩楊柳観音像（癡絶道沖の賛あり）	けんぽんたんさいようりゅうかんのんぞう	1幅	尾道市東土堂町	昭54.11.2	絹本白描淡彩，軸装	縦35.7cm，横18.4cm	古くから仏画の画題として愛好され，種々の病理の消除を本誓とするという楊柳観音を描いたもので，小幅ではあるが，繊細流麗な墨線は像の隅々にまで生きており，特に宝冠の描写は精緻である。寺伝によると牧谿（もっけい）筆というが落款等もなく，確認の根拠を欠いているものの画幅上部の癡絶道冲（ぎぜつどうちゅう）の賛により，南宋時代（12～13世紀）のすぐれた画工の手になる作品であることはうなずける。 なお，賛者癡絶道冲（ぎぜつどうちゅう）は，淳祐10年（1250）に死去しているから，この作品は13世紀半ば以前のものと思われる。 光明寺は，南北朝時代初期（14世紀前半），足利尊氏の従軍僧によって天台宗から浄土宗に改宗したと伝えられる。		
県	重要文化財(絵画)	絹本著色地蔵菩薩十王像	けんぽんちゃくしょくじぞうぼさつじゅうおうぞう	1幅	尾道市東土堂町	昭55.6.24	絹本著色，軸装	縦94.3cm，横86.0cm	嘉靖41年（1562）朝鮮半島で描かれた仏画で，李朝朝鮮の国王や王妃等の寿命長久と国土の安泰，人民の安寧，仏法興隆を願って，清平山人が描いたもの。この十王像一面を描き清平寺に安置して香をたき，更にその功徳を一切衆生に及ぼさんことを祈念したと記す。 中央に地蔵菩薩，その周辺に仏法を守護し死者を裁く十王を描く。 光明寺は浄土宗寺院である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本著色如意輪観音像	けんぽんちゃくしょくにょいりんかんのんぞう	1幅	尾道市東久保町	昭62.3.30		縦80cm，横40.5cm	南北朝時代の建武元年（1334)の作で，図の右下に墨書銘が見える。寺伝では足利尊氏が寄進したという。 六臂（ぴ）の如意輪観音を墨線で描き，彩色はほとんどない。水墨画的な淡彩の画像は鎌倉時代末期から室町時代（1333～1572年）へかけて出始め，それは仏画本来の礼拝の対象としてのものから鑑賞的な画へと移行することを意味するものと言われる。本画像は，上記のような絵画史的な見解とその記年銘がほぼ一致する点からみて，貴重な資料であると考える。 如意輪観音は，変化観音の一つで，如意とは如意宝珠，輪とは法輪を意味し，それらの功徳によって衆生の苦を抜き，楽を与える観音である。像形には二臂，四臂，六臂，八臂，十臂，十二臂等があるが，六臂の例が多く流布しており，その最も著名な例としては，大阪観心寺の木造如意輪観音坐像があげられる。		

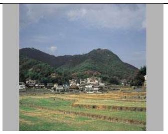
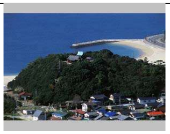
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(絵画)	絹本著色千手観音像	けんぽんちゃくしょくせんじゅかんのんぞう	1幅	尾道市東久保町	昭62.3.30		縦171cm，横82cm	鎌倉時代末期(14世紀前半)の作と推定される。 絵画的な観点からは，画面下方の濃褐色の岩，上方の濃紺の岩山や虚空，そうした暗いバックを背景として，周囲に二十八部衆を従えて中央に大きく金色の千手観音像，上方に同じく金色の五観音が浮かび上がるように鮮やかに表現されているのはまことに優美である。千手観音のやや細面で沈うつそうな表情に元末期(14世紀)の画法の影響が見られるようである。光背(こうはい)の文様にも見られるように細緻な表現がよくなされており，六観音を一図であらわす特異さにも注目すべきところである。 千手観音は四十本の脇手を持ち，舟形光背を負っている。 画面向かって左下に「備後国尾道浦」，右下に「浄土寺常住」の墨書銘が認められ，本画像が浄土寺伝来の什物であることが明らかである。		
県	重要文化財(絵画)	絹本著色浄土曼荼羅	けんぽんちゃくしょくじょうどまんだら	1幅	尾道市東久保町	昭62.3.30		縦128cm，横128cm	鎌倉時代の作で，もとの軸木の銘によると寛元元年(1243)作，正慶2年(1333)修理と伝えられる。 阿弥陀三尊を中心に多数の仏たちが集まる極楽浄土の情景を描いたもので，当麻曼荼羅と呼ばれる形態の図の一つである。左右および下端にはイダイケ夫人が阿弥陀如来に帰依する物語や十六観想図などが描かれている。 絹地が横に三幅に継いであり，普通は縦継ぎであるのと異なる。このような横継ぎは幅広い画面の場合に見られる。また，画面右端の上端辺の風景描写が日本的な図になっており，中央の阿弥陀三尊は，仏身は金泥で，衣文は切金が用いられている。 廿日市市潮音寺蔵の浄土曼荼羅(当麻曼荼羅形式)に次ぐ鎌倉時代末期の，本県には少ない遺例と言える。		
県	重要文化財(絵画)	絹本著色仁王経曼荼羅	けんぽんちゃくしょくにおうきょうまんだら	1張	尾道市東久保町	昭62.3.30	絹本著色，軸装	縦161cm，横128.5cm	鎌倉時代中期(13世紀)の作。方形の三区画に分けられ，中央に不動明王，周囲に四大明王や四天王などを描いている。 仁王経曼荼羅とは，国家人民の安穏を目的とする「仁王経法」という修法の本尊である。息災，増益，敬愛，調伏(ちょうふく)など四種の修法を行うときに懸けられていた。 この図は息災法用で，山口県神上寺に伝わる図の原本を写したと考えられている。		
県	重要文化財(絵画)	絹本著色釈迦八相図	けんぽんちゃくしょくしゃかはっそうず	8幅	尾道市西土堂町	平8.3.18	絹本著色， 三幅一鋪 第一幅「託胎」，第二幅「降誕」，第三幅「試芸」，第四幅「出家」，第五幅「牢度叉」，第六幅「降魔」，第七幅「転法輪」，第八幅「涅槃」	第一幅／縦114.0cm，横119.5cm 第二幅／縦112.1cm，横120.1cm 第三幅／縦111.8cm，横119.4cm 第四幅／縦113.6cm，横119.0cm 第五幅／縦113.5cm，横120.4cm 第六幅／縦112.6cm，横119.1cm 第七幅／縦113.1cm，横119.4cm 第八幅／縦112.2cm，横119.8cm	持光寺の八相図には，第一幅から順に「託胎(たくたい)」「降誕(こうたん)」「試芸(しげい)」「出家(しゅっけ)」「牢度叉(ろうどしゃ)」「降魔(ごうま)」「転法輪(てんぽうりん)」「涅槃(ねはん)」の場面が描かれており，各幅に数事蹟ずつ，30余りの事蹟が描かれている。 この八相図は，微妙な暈(ぼ)かしによって立体感を表し，繊細な色使いが施され，わが国中世の倭画(大和絵)に特有の高い所から見下ろす空間法が用いられている。わが国に残る大画面形式の釈迦八相図は，これを含めて6例しかなく，中世に描かれた八相図八幅本の中で，完存している唯一の事例である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本著色伝足利尊氏像	けんぽんちゃくしょくでんあしかがたかうじぞう	1幅	尾道市東久保町	平28.3.28	絹本著色，一幅一鋪，軸装	縦107.0cm，横56.7cm	画面中央部に，束帯姿で高麗縁(こうらいべり)の上げ畳に坐す人物像を描く。人物の容貌は穏やかな印象に整えられており，その描写には似絵的な特徴が見られる。着している袍(ほう)には足利将軍家も家紋に用いた五七桐(ごしちのきり)が一面に散らされている。 本画像は，足利尊氏と深い関係があった浄土寺に尊氏像として伝来した肖像画である。画賛や花押，奉納文書などはなく，像主は未詳であるが，足利将軍家との関わりをうかがわせる図様などや高い技量を身に着けた中央絵師の手による制作と見られる出来映えは，広島県内の中世に遡る数少ない武人肖像画の中でも大変貴重である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本著色仏涅槃図	けんぽんちゃくしょくぶつねはんず	1幅	尾道市西土堂町	平28.10.27	絹本著色，六幅一鋪，軸装	本紙縦202.9m，横154.3cm	仏涅槃図は釈迦の臨終の景観を描く仏画である。持光寺に伝わるこの涅槃図は，沙羅(さら)双樹(そうじゅ)の下，宝(ほう)台(だい)上に横たわる釈迦を中心に，それを取り巻く会衆(かいしゅう)や動物が卓越した筆致・画技によって描かれている。 本図は，旧裏打ち紙の銘文により，弘安７年(1284)に画師(えし)法橋(ほっきょう)若狭(わかさ)によって描かれ，江戸時代中期までに3度の修理が行われたと伝わる。後補箇所が多いものの，本図の主要部である釈迦と周囲の会衆の表現はほぼ制作当初の状態をとどめている。 制作年代が鎌倉時代に遡る涅槃図の遺例が少ない中で，本図は制作優秀であるとともに，度重なる修理を経ながら大切に使用され，受け継がれてきた歴史的価値を有することから，貴重である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造文殊菩薩座像	もくぞうもんじゅぼさつざぞう	1躯	尾道市東久保町	昭29.9.29	寄木造，彩色	像高63cm	背に頭光身光を負い，右手に宝剣，左手に経巻を持ち，獅子の背上の蓮華座に半跏(はんか)坐している。金鈴をまとい眼光爛々たる獅子は，文殊菩薩に比べて大ぶりに造られ，南北朝時代(1333～1392)の作とされる。なお,本像を納める厨子の床板に，南都津波居(つばい，椿井)仏所で造像され，永和4年(1378)7月4日に安置された旨の墨書銘が見られる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	尾道市東久保町	昭37.7.20	寄木造，漆箔	像高88cm，膝張72cm	浄土寺阿弥陀堂の本尊で，紙本墨書定証(じょうしょう)起請文(きしょうもん)(重要文化財)に記されている像と推定され，脇侍の観音菩薩・勢至(せいし)菩薩とともに内陣に安置されている。 寺伝では定朝作と伝えるが，定朝様を忠実に踏襲した仏師による平安時代末期(12世紀)の作と考えられる。		関連施設：浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(彫刻)	木造仏殿様厨子	もくぞうぶつでんようずし	1基	尾道市向島町	昭46.4.30	桁行26cm，梁間17cm，棟高(基壇とも)73cm，木造漆塗		本品は，工芸品であるとともに，和様を一部に交えた禅宗様の室町時代(1333～1572)の仏殿建築を彷彿しており，多少の欠損と塗りの剥落はあるが，小さな作品であるにもかかわらず，細部に完巧な時代の特色を示しており，この種のものとしては珍らしい秀逸な作品である。		

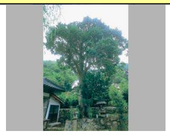
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財（彫刻）	木造地蔵菩薩坐像	もくぞうじぞうぼさつざぞう	1躯	尾道市御調町今田	昭50.9.19	寄木造，臼形二重蓮座	像高41cm，膝張34cm，光背の径29.1cm，台座の高さ23cm	円頂で眉間に白毫をあらわし，半眼に開いた眼は木彫で，首には三道がある。通肩（つうけん）にかけた法衣及び身肌は金色で，衣には唐草や定紋を描き，その彫法は写実的で流麗である。胸には透彫（すかしぼり）金具の瓔珞をかけている。右掌には当初の錫杖（しゃくじょう）をもち，左掌には宝珠をのせていたと思われるが今は欠失している。台座，光背（こうはい）ともに当初のもので，室町時代（1333～1572）の作である。 ※白毫（びゃくごう）…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあって光明を放つとされる。 ※瓔珞（ようらく）…珠玉をつづった首飾り		
県	重要文化財（彫刻）	木造持国天立像	もくぞうじこくてんりゅうぞう	1躯	尾道市御調町下山田	昭50.9.19	寄木造（頭部・胴体は一木彫成）	高さ40.5cm	寄木造ではあるが，頭部と胴体は一木彫成にした小像である。鎧を着け右手を肩の上まで上げて鉾（ほこ）を持ち，左手は腰においている。肩裂（かたぎれ）及び帯布を着け，腰の両側から鰭（ひれ）ぎぬを垂らしており，もとは彩色されていたと思われる痕跡があるが，今はほとんど剥落している。衣文の彫りは深く立体感に富んだ秀作で，頭部に前立（まえだて）を造り，頭髪を束ねて五眼をはめ，口を強く結んだ気力にあふれる相の像である。室町時代（1333～1572）の作。		
県	重要文化財（彫刻）	木造一鎮上人坐像	もくぞういっちんしょうにんざぞう	1躯	尾道市東久保町	昭54.11.2	寄木造，乾漆，玉眼	像高80cm，膝張82cm	時宗の寺院である西郷寺の開基と伝えられる六代遊行（ゆぎょう）上人一鎮の坐像である。 この像は非常に写実味豊かで，頭部・顔面の筋骨や肉付きは巧みに表現されており，顔面・両手の皮膚色・唇の朱色等の彩色にすぐれている。像の仕上げは，木彫の上に麻布を貼り漆を塗布する方法を二度くり返し，像全体に穏やかさを漂わせる工夫がなされており，作者は不詳ながら，その確かな技術がうかがえる。南北朝時代（1333～1392）の作。		
県	重要文化財（彫刻）	金銅阿弥陀如来及び両脇侍立像	こんどうあみだにょらいおよびりょうきょうじりゅうぞう	3躯	尾道市東土堂町	昭55.6.24		中尊阿弥陀如来立像／全長57cm，宝身48cm，台座9cm 脇侍観世音菩薩立像／全長39cm，宝身31cm，台座7.5cm 脇侍勢至菩薩立像／全長38cm，宝身31cm，台座7cm	鎌倉時代（1192～1332）以降，全国的にその造立信仰が流行した，信濃国長野の善光寺（ぜんこうじ）の本尊を模したと称せられている「善光寺如来」の一作例である。本来あったはずの一光三尊の板光背（こうはい）を欠除しているのは惜しいが，室町時代（1333～1572）のすぐれた遺品である。中尊の両手とも刀印であるのはすこぶる珍しい。東日本に多く西日本に比較的少ないと従来いわれてきた善光寺如来像の分布に，新しい一例を加えるものである。 光明寺10代住職融印が，文明元年（1469）善光寺本尊を写した本尊を，大永2年（1522）同じく融印が開創した塔頭南之坊に安置したものという。		
県	重要文化財（彫刻）	木造大日如来坐像　金剛界　附台座	もくぞうだいにちにょらいざぞう　こんごうかい つけたり　だいざ	1躯	尾道市東久保町	昭62.12.21	寄木造	像高78.5cm，膝張60.0cm，台座高43.0cm	いわゆる智拳（ちきょ）印を結ぶ結跏趺坐（けっかふざ）の金剛界大日如来である。 本像は寺伝によれば，別件胎蔵界大日如来坐像（県重要文化財）とともに浄土寺末寺の極楽寺の本尊であったと伝えている。面部の彫り口は穏和で，また着衣の衣文の彫り口も浅く，像底からも内刳り（うちぐり）が施されており，内刳りは大きいなど平安時代（794～1191）の特徴がよく出ている。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
県	重要文化財（彫刻）	木造大日如来坐像　胎蔵界　附光背	もくぞうだいにちにょらいざぞう　たいぞうかい つけたり　こうはい	1躯	尾道市東久保町	昭62.12.21	寄木造，舟形板光背	像高90.0cm，膝張68.0cm，台座高118.0cm	法界定印（ほうかいじょういん）を結ぶ結跏趺坐（けっかふざ）の胎蔵界大日如来である。檜材寄木造である。頭頂には余り高くない宝髻（ほうはつ）があるが，これは別造りで地髪部に矧（は）ぎ合わす。金剛界の像とは彫技や製作技法も異なり，別人の作とみられるが，胎・金二界の大日如来が遺存することは珍しく，平安時代（794～1191）の作ということとあいまって重要な作例と考えられる。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
県	重要文化財（彫刻）	木造千手観音立像	もくぞうせんじゅかんのんりゅうぞう	1躯	尾道市東久保町	平3.12.12	寄木造，玉眼，金泥彩漆箔	像高139.0cm，裾張34.0cm	頭頂から足下，脇手，瓔珞金具，表面彩色等，細部まですべて当初のまま残っており，その保存状態はきわめて良好である。作風は，細部まで非常に丁寧な作りで，優れた技術をもった仏師の作と思われる。光背（こうはい），台座も同時代のものと思われる貴重な仏像である。鎌倉時代中期（13世紀中頃）の作である。 ※瓔珞（ようらく）…珠玉をつづった首飾り		
県	重要文化財（彫刻）	木造真教上人坐像	もくぞうしんきょうしょうにんざぞう	1躯	尾道市西久保町	平3.12.12	寄木造，玉眼，彩色	像高82.0cm，肩張48.0cm，膝張74.0cm，面長18.0cm，面幅16.0cm	時宗の開祖一遍上人の高弟「真教」の僧形坐像である。法衣は白衣の上に墨染めの衣を着し，袈裟を懸けた姿を写実的に彫り出している。一遍の死後，教団として実質的に組織化した真教上人の数少ない彫像であり，貴重なものである。 製作年代は鎌倉時代後期または南北朝時代（14世紀）と推定される。		
県	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来立像	もくぞうあみだにょらいりゅうぞう	1躯	尾道市西久保町	平28.10.27	檜材，寄木造，差し首，玉眼嵌入，白毫水晶（新補）嵌入，肉髻珠（後補）嵌入，着衣全体に截金・盛り上げ彩色	像高：130.9cm	常称寺本堂本尊である本像は，頭躰部のバランスがよく整えられているとともに，流麗な衣文(えもん)が的確に彫成され，着衣全体には精緻な文様が截(きり)金(かね)や盛り上げ彩色による高度な技術で表現されており，これらは当初の状態でほぼ完全に残っている。 本像は，平成24年度の保存修理の際，足枘(あしほぞ)の銘文から，正中２年（1325）に仏師美作(みまさか)法橋(ほっきょう)宗擔(そうたん)（又は「宗誓（そうせい）」）により約3か月弱の期間で制作されたことや，50人以上の仏名の寄進者などが確認された。 本像は，数少ない時宗(じしゅう)寺院の遺構である本堂本尊として制作年次などが分かることに加えて，制作優秀であり，特に着衣全体の精緻な装飾が当初の状態でほぼ完全に残っている遺例がほとんどないことからも，貴重である。		

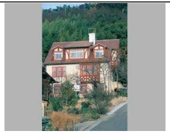
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財（彫刻）	木造五劫思惟阿弥陀如来坐像	もくぞうごこうしいあみだにょらいざぞう	1躯	尾道市西土堂町	平28.10.27	檜材か，寄木造，玉眼嵌入，白毫水晶嵌入，肉髻珠（後補）貼付	像高：112.0cm	五劫思惟阿弥陀如来像は，五劫という長い時間思惟にふけり，理髪をしなかったために長大な頭髪となったことを表す大きく膨らんだ頭部が特徴である。持光寺本堂本尊である 本像は，風格のある姿態のバランス，ふくよかであるが目鼻立ちのすっきりとした面部の表現，整えられた衣文表現などに優れた造形感覚が認められる。 当寺の古記録によると，本像は元禄15年（1702）に仏師(ぶっし)法橋(ほっきょう)安(あん)清(せい)により造像されたことが記されている。 江戸時代以前の木造彫像の五劫思惟阿弥陀如来像は全国的にほとんど遺例がない中で，本像は彫技が的確であり，造形的に優れているだけでなく，制作年代や作者などの由緒が分かるものとして，貴重である。		
県	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来及び両脇侍立像 附 観音菩薩像内納入品 阿弥陀如来印仏 十五枚 勢至菩薩像内納入品 阿弥陀如来印仏 包紙添 十一枚 内一枚に弘安八年二月の記がある 阿弥陀如来像内納入品（追納） 一、台座光背寄進状 包紙添 一通 一、位牌 一柱	もくぞうあみだにょらいおよびりょうきょうじりゅうぞう	3躯	尾道市東久保町	令和元年（2019）10月21日	檜材，寄木造，金泥塗り，截金，玉眼嵌入	阿弥陀如来立像（中尊） 像高：98.9cm 髪際高：91.8cm 観音菩薩立像（左脇侍） 像高：66.3cm 髪際高：55.8cm 勢至菩薩立像（右脇侍） 像高：66.4cm 髪際高：55.7cm	本三尊像は，時宗寺院・西郷寺の本堂本尊で，阿弥陀如来像を中尊として，前傾の観音菩薩像と勢至(せいし)菩薩像を脇侍とする，来迎形の阿弥陀三尊像である。檜材。寄木造。阿弥陀如来像は，ふくよかな顔貌，矩形(くけい)のがっしりした体躯に緩やかな衣文線が施され，立体的で端正な造形を持つ。両脇侍像は，髻の高い細身の像容で，随所に細かな部材を組み合わせて破綻のない微妙な姿態が生み出され，絵画的な律動感がある。いずれも仏師の優れた造形感覚と高い技術を読み取ることができる。 平成25・26年の保存修理の際，両脇侍像の像内から印仏が発見され，その中に弘安８年（1285）の年紀が確認された。納入品は造像当初のものと見られ，本三尊像は同年に制作されたと考えられるに至った。 以上より，本三尊像は，制作優秀であるとともに，年代の明らかな来迎形阿弥陀三尊像の基準作に位置付けられるため，本県の彫刻史上特に重要な作品であると評価できる。 また，印仏を始めとする納入品も，本三尊像の由緒・伝来を示す重要な資料である。		
県	重要文化財（工芸品）	銅製鰐口	どうせいわにぐち	1口	尾道市東久保町	昭29.9.29	銅製	直径37cm，重量15kg	鰐口は，鉦鼓（しょうこ）を二つ合せた形に似て，神社仏閣の軒先に懸けてあり，前面に鉦（かね）の緒という布縄を垂らし，参詣人はこの緒を手に持ち，振って鼓面を打ち礼拝するもので，本品も浄土寺本堂（国宝）の正面に懸けられている。刻銘があり，貞和5年（1349）の作であることが分かる。 「備後国尾道浦浄土寺観音堂也」「貞和五年己丑卯月十八日大工阿部房綱」		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
県	重要文化財（工芸品）	金銅蓮花輪宝文置説相箱	こんどうれんげりんぽうもんおきせっそうばこ	1合	尾道市東土堂町	昭36.4.18		縦39cm，横36cm，高さ12cm	長方形の箱で，導師が説教の原稿などを入れる。 木製黒漆塗りで周囲に金銅の蓮華(れんげ)文や輪宝（りんぽう）文などの金具を置き，ふちに唐草文を浮彫りにした帯板金具を貼り，上げ底の脚部は金銅板覆輪（ふくりん）を施した格狭間（こうざま）を透かす。製作の年時は「慶長第三戊戌（朱漆書の銘）」すなわち慶長3年（1598）で，手法と様式は安土桃山時代（1573～1602）の特徴を示している。		
県	重要文化財（工芸品）	白紫緋糸段威腹巻 附 兜眉庇	しろむらさきひいとだんおどしはらまき	1領	尾道市因島中庄町字寺迫金蓮寺内	昭36.11.1		高さ53cm，胴回り72cm	腹巻は，背中引合せ形式の初期のものは袖も兜もない軽武装用の鎧で，鎌倉時代末頃（14世紀前半）発生したと思われる。その後，室町時代（1333～1572）には大流行し，背中の引き合わせ部分に背板をつけ，更に袖をつけ兜も具備するようになる。 本品はそのような室町時代末期の腹巻と思われる。小札を紫・緋・白糸で段々に威（おど）した，美しく軽快な姿の腹巻である。 伝承によると因島村上家九代の新蔵人吉充が，小早川隆景より拝領したと言い，村上家に代々伝えられたものである。		
県	重要文化財（工芸品）	鉄製燈籠	てっせいとうろう	2基	尾道市東久保町	昭37.7.20	鋳鉄製の屋蓋や柱を組み合わせたもの。	高さ37cm，幅28.5cm	もと浄土寺利生塔（りしょうとう）にあったと伝えられる一対の燈籠。春日厨子の形をとる。鋳鉄製の屋蓋や柱を組み合せたもので，軒ぞりを美しくするため，かや負いの中央に折れを作るなど，時代の建築の作風をよく反映する。屋根の上面には三鈷(さんこ)のすかしを二つ並べるが，ひねりこ連子（れんじ）に菱形をきざんだ欄間，きびきびしたくり形の格狭間（こうざま）などは南北朝時代初期（14世紀前半）ごろの様式をよく示している。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
県	重要文化財（工芸品）	木造厨子 木造厨子台（旧太子堂安置） 1基	もくぞうずし もくぞうずしだい	3基	尾道市東久保町	昭37.7.20	春日厨子 大（高さ1.6m）中（高さ1.3m），小（残欠） 厨子台 幅2.7m，奥行1.28m，高さ32cm		3基の厨子は春日厨子で，それぞれ聖徳太子像（重要文化財）を納めていたものである。 厨子の台は，重ね菱の文様を連子の中にきざみ出した手法は多宝塔須弥壇のそれと同じで，厨子とともに南北朝時代（1333～1392）ごろの作と推定される。台及び厨子とともに簡素なすっきりした秀作である。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2362）
県	重要文化財（工芸品）	太鼓	たいこ	1張	尾道市東久保町	昭41.4.28	皮に墨で雲龍と鳳凰が描かれ，鋲とめ	径96cm，高さ88cm，胴回り301.5cm	胴内銘によると，正和5年（1316）に大工教通・友延により製作されたもので，皮に墨で雲龍と鳳凰がかかれており，鋲留（びょうどめ）である。また，皮の張り替えは，延元元年（1336）・延文4年(1359)・応永6年（1399）・応永34年（1427）・元和4年（1618）の5回あり，何年で張り替えたかがわかり，歴史的資料としては珍しい。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2362）
県	重要文化財（工芸品）	銅製地蔵菩薩懸仏	どうせいじぞうぼさつかけぼとけ	1面	尾道市瀬戸田町御寺	昭62.3.30	浮彫，半肉彫，毛彫	径24.2cm	鎌倉時代（1192～1332）の作。円形銅板上中央に宝珠と錫杖（しゃくじょう）とをもつ地蔵菩薩が蓮台上に坐し，頭光身光を負う姿に表されている。地蔵と蓮台は，一枚の銅板を槌で起して薄肉に押出して現わし，衣文蓮台などの細部は，よどみのない流れるような蹴彫（しゅうちょう）で表現し，頭光・身光とともに円形銅板上に鋲止めされている。 懸仏は仏像などを金属などの円板上に作り出したもので，神社や寺院の内陣に懸けられていた。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(工芸品)	銅鐘	どうしょう	1口	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平5.2.25	和鐘，撞座に蓮華文	総高93.5cm，口径59.5cm	戦国時代の天文24年(1555)製作の和鐘で，三原鋳物師の製作したものである。撞座(つきざ)には蓮華文を鋳出している。 また，慶長の追銘には，豊臣秀吉の朝鮮侵略の時に供出されようとした本鐘が，町衆の寄附によって免れたことが刻してあり，天文年間(1573～1591年)当時の和鐘様式を良く伝えているのみならず，向上寺自体の歴史を語る資料としても貴重である。 向上寺は臨済宗仏通寺の大通禅師の開山になる寺で，瀬戸田水道北口に位置する。国宝三重塔があることでも著名である。		
県	重要文化財(工芸品)	金銅製有頸五輪塔形舎利塔	こんどうせいゆうけいごりんとうがたしゃりとう	1基	尾道市瀬戸田町御寺(福山市西町二丁目 広島県立歴史博物館寄託)	平8.9.30	銅造，鍍金	総高6.45cm，舎利容器高2.2cm	平安時代末期から鎌倉時代(12世紀後半～14世紀前半)にかけて製作された舎利容器である。通常の五輪塔と異なり，火輪と水輪の間に円筒状の部分が作られており，むしろ宝塔を意識したデザインと言える。水輪部内部に舎利を納める円筒とその蓋がある。蓮華座など各所に細かな細工が施され，洗練された美しさを感じさせる。 光明坊は鎌倉時代以来の古刹であり，西大寺流律宗の影響が伝わる。		関連施設：広島県立歴史博物館 (084-931-2513)
県	重要文化財(工芸品)	金銅火焔宝珠形舎利容器	こんどうかえんほうじゅがたしゃりようき	1基	尾道市東久保町	H26.2.27		総高　14.2cm，基壇径　5.6cm，独鈷杵(高さ)4.6cm，輪宝径　4.3cm(輪宝中央枘穴　縦横　0.4cm×0.5cm)，蓮華座径4.4cm，宝珠(高)3.9cm　(径)3.2cm　火焔最大幅　5.6cm	当該舎利容器は，下から，台座，輪宝(りんぼう)及び宝珠から成る。 台座は，六方隅入りの円形の基壇の上に反花座(かえりばなざ)が載り，その上に独鈷杵(とっこしょ)が立てられる。独鈷杵の上部は輪宝と宝珠を連結するほぞとなる。 輪宝は，中央部に独鈷杵の先が入るように四角い穴が設けられている。 宝珠は，蓮華座の上に載り，四方を火焔が囲んでいる。蓮華座は，５段で各段８弁の計40弁の蓮弁から成る。宝珠内部には，白色とやや黄色味を帯びた米粒状の舎利が納められている。いずれも水晶製と思われる。宝珠は水晶製で，これ以外は金銅製で鍍金が施されている。 広島県重要文化財「浄土寺文書」によると，暦応３(1340)年，足利尊氏の弟の直義(ただよし)が仏舎利２粒を浄土寺に奉納したことが知られる。当該舎利容器の制作時期は南北朝時代と思われ，これがこの仏舎利を収めた容器である可能性がある。		関連施設：浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書西国寺寄附帳	しほんぼくしょさいこくじきふちょう	1帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	紙本墨書，折本		南北朝時代末期から室町時代(14～16世紀)にかけて行われた西國寺の諸堂宇の建立再建に関する寄附を中心に記録したもの。巻頭の山名持豊(宗全，1404～1473)をはじめ山名氏一族や備後守護代・犬橋満泰などの山名氏被官を中心に23名の名前と寄進内容が記されている。「沼隈郡新庄長者実秀」の名もみえ，中世の富裕層の一端を見ることもできる。 西國寺は今日までに幾度かの災禍に遭い，平安時代(794～1191)に白河法皇により再建，南北朝時代から室町時代にかけては，備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書西国寺建立施主帳	しほんぼくしょさいこくじこんりゅうせしゅちょう	1帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	紙本墨書，折本	縦33cm，横122.4cm(八折り)	室町時代(1333～1572)の西國寺再建で施主となった人たちの署名帳である。筆頭の「征夷将軍」は花押から見て足利6代将軍義教(1394～1441)と考えられ，次いで本願導師である西國寺の宥尊(ゆうそん)僧正，次いで，細川持之，畠山持国，山名持豊，大内教弘など，幕府の重臣や守護大名たちの名が見える。 西國寺は今日までに幾度かの災禍に遭い，平安時代(794～1191)に白河法皇により再建，南北朝時代から室町時代にかけては，備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書西国寺不断経修行事及西国寺上銭帳	しほんぼくしょさいこくじふだんぎょうしゅぎょうじおよびさいこくじあげせんちょう	1帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	紙本墨書，折本	縦30.3cm，横702cm(52折)	戦国時代の文明3年(1471)6月16日，西國寺の不断経修行を再興するため，西國寺支配下の各坊に上銭をさせた記録である。この一帖に書き上げられた各坊僧侶の数は197筆にのぼり，尾道をはじめ，吉舎・今高野山・御調などの備後国内の者や備中薬王寺などの名が見える。 不断経修行は天仁元年(1108)堀川院追福のため始まったが，武家の領地押領のため中断していた。 西國寺は今日までに幾度かの災禍に遭い，平安時代(794～1191)に白河法皇により再建，南北朝時代から室町時代(14～16世紀)にかけては，備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財(典籍)	版本大般若経 附　経櫃　3櫃 　　中箱　60箱	はんぼんだいはんにゃきょう	600帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	版本，折本	縦26.3cm，横10cm程度	近江源氏の佐々木氏頼が康暦元年(1379)に開版した版木で摺った大般若経で，600帖を完備しているのは珍しい。経巻の奥書や経櫃の墨書銘により，応永9年(1402)6月に西国寺薬師堂(金堂)に施入されたことが記されている。 蓋裏墨書銘は次のとおりである。 「寄進備後国御調郡尾道浦西国寺薬師堂　応永九年壬午六月八日勧主権律師慶弁願主興賢」		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経 附　経櫃　1櫃 　　中箱　18箱	しほんぼくしょだいはんにゃきょう	112帖	尾道市西則末町	昭30.1.31	紙本墨書，冊子，旋風葉(せんぷうよう)		平安時代の承安5年(1175)に藤原盛時が三島大明神に施入した大般若経。全巻に施入の奥書がある。1行17文字で，界線は墨書である。旋風葉(せんぷうよう)の表装を施したこの経巻は，全巻を同時期に書写したものではないようで，奈良・平安時代初期(8世紀前半)の書風も見える。 天文22年(1553)に栗原六村の氏子により八幡宮に寄進され，以来，栗原八幡神社に伝えられた。櫃の蓋裏に墨書で寄進した旨が記されている。 「天文廿二天癸丑栗原之惣六村願主八幡宮御経五百内六百内住侶潤正月十三日氏子諸人」		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経	しほんぼくしょだいはんにゃきょう	2帖	尾道市美ノ郷町本郷	昭30.1.31	紙本墨書，折本		平安時代の永久6年(1118)に明法生藤原季行が書写した旨を記している。巻第百五十三及び巻第百五十四の二帖が伝えられ，各巻に奥書がある。1行17文字，界線は墨書である。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財（典籍）	紙本墨書西国寺塔婆勧進帳	しほんぼくしょさいこくじとうばかんじんちょう	1巻	尾道市西久保町	昭31.3.30	紙本墨書，巻子装	縦42.0cm，横255cm	室町時代の永享元年（1429）に宥尊（ゆうそん）僧正が西国寺三重塔（重要文化財）の建立を発願した際，寄附を募るために趣旨を記した勧進帳である。 西國寺は今日までに幾度かの災禍に遭い，平安時代（794～1191）に白河法皇により再建，南北朝時代から室町時代（14～16世紀）にかけては，備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財（典籍）	紙本墨書因島村上家文書	しほんぼくしょいんのしまむらかみけもんじょ	3巻	尾道市因島中庄町字寺迫 （水軍城資料館寄託）	昭37.3.29	紙本墨書，巻子装	第一巻長さ222.7cm，幅40.6cm。第二巻長さ746cm，幅40.6cm。第三巻長さ450cm，幅40.6cm	因島を中心とする中世荘園関係文書，感状及び書簡など50通からなる因島村上家伝来の古文書群。鎌倉時代から戦国時代（12世紀末～16世紀）の毛利・小早川関係のものまであるが，すべてが因島村上家に関係するものではない。その関わりについて種々論議されているが，確たる説はない。いずれにしろ，中世における因島及び瀬戸内海地域の状況を知るうえで貴重な史料である。 因島村上家はいわゆる三島村上家のひとつである。室町時代（1333～1572）以来因島や向島などを拠点に活動し，金蓮寺や中庄八幡宮など因島村上家ゆかりの社寺も数多く見られる。後，小早川氏の水軍の一翼を担った。		
県	重要文化財（典籍）	金蓮寺在銘瓦 宝徳三年結縁衆の名を記す	こんれんじざいめいかわら	4巻	尾道市因島中庄町字寺迫　金蓮寺内	昭37.3.29	丸瓦・棟瓦，銘へら彫刻	丸瓦縦32cm，横14cm，高さ7.6cm 棟瓦縦30cm，横29cm	因島村上吉資が薬師堂を建立した翌年の宝徳2年（1450）に御堂の上葺のことを箆書（へらがき）した丸瓦と棟瓦である。尾道の瓦大工が製作したもので，住持快秀（かいしゅう），大壇那宮地大炊助妙光（おおいのすけみょうこう），瓦大工尾道住衛門五郎経次などとともに，浦々の結縁合力者の名が列記されている。宮地妙光は俗名明光，村上吉豊・吉資の家老であったという。また，伯耆大山の僧侶の名前も見られ，瀬戸内と日本海の交流の様子をうかがうことができる。 金蓮寺は，因島のほぼ中央にあり，因島村上家の菩提寺である。宝徳元年（1449）村上吉資が創建したと言うが，開基はそれ以前と思われる。		
県	重要文化財（典籍）	法華経版木	ほけきょうはんぎ	62枚	尾道市東久保町	昭38.11.4		縦65cm，横90cm	南北朝時代の応永2年（1395）9月から3年正月にかけて，僧行安の勧進により，浄土寺で開版された版木。広く俗人の理解をはかるため，経文に送り仮名や返り点を施しており（巻八の刊記），付訓の版経の古い資料として貴重である。また，この版木は，応永5年（1398）重刊近江八幡神社蔵の倭点法華経と本文訓点が大体同じであり，播磨書写山の心空の校定版の改刻版の一つと言われる。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
県	重要文化財（典籍）	梵網経版木	ぼんもうきょうはんぎ	6枚	尾道市東久保町	昭38.11.4		縦65cm，横90cm	室町時代の応永11年（1404）浄土寺で作られた版木。「備後国尾道浦於浄土寺開版応永十一年甲申」の刊記があり，地方における印刷文化発達の事例として貴重である。 梵網経は5世紀後半に中国で成立したと推定されている経典。日本仏教でも尊重され，多くの注釈が作られた。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
県	重要文化財（典籍）	浄土寺文書	じょうどじもんじょ	104通	尾道市東久保町	昭41.4.28	紙本墨書		鎌倉時代末期から室町時代（14～16世紀）にかけての文書類である。浄土寺が，天皇家をはじめ足利将軍家・管領・守護・守護代などと密接な関係を保ちながらその信仰を集めるとともに，寺領荘園の維持に努めてきたその時代推移を語る資料類である。 これらを大別すると 1．信仰関係，2．皇室・足利氏以下諸豪族から荘園までを網羅した文書，3．寺領年貢書付となり，それらは相互にからみあっている。寺内にあった利生塔の料所櫃田村（双三郡君田村）の百姓等が，武家代官に対する年貢拒否を申し合わせた連署起請文のような，庶民の動きを示す文書も含まれている。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
県	重要文化財（典籍）	紺紙金銀泥大乗十法経	こんしきんぎんでいだいじょうじっぽうきょう	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	巻子本	全長1,012cm，幅25.7cm	紺紙十八紙を継いで作られた経巻で，巻頭表には金泥をもって宝相華（ほうそうげ）唐草文様に題箋を描いて「大乗十法経一巻」の経題を書いている。見返しには，釈迦が宝樹の下で大衆説法をしている図を描写した表紙をつけている。本文は「仏教大乗十法経」から書き始め，金銀泥で全罫行の間に金銀一行ずつ交互に書き写す交書で記され，流麗な楷書で書かれた装飾経で，奥書はないが平安時代（794～1191）の作である。		
県	重要文化財（典籍）	紺紙金銀泥無量義経	こんしきんぎんでいむりょうぎきょう	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	巻子本	全長846cm，幅25.6cm	紺紙十七紙を継いだ経巻で，巻頭に見返し経があったと思われるが，ほとんど欠失してその残部をわずかに残すのみである。巻末には杉製の軸棒をつけ，その両端の金銅[84a3]形（ばちがた）金具は完存しており，魚々子（ななこ）で宝相華（ほうそうげ）文様を彫り出し，当時の工芸技術を知るうえでの資料となる。本文は，金銀泥で全罫行間に金銀一行ずつ交互に流麗な楷書で書き写したいわゆる交書で，奥書はないが平安時代（794～1191）の装飾経である。		
県	重要文化財（典籍）	紺紙金泥大日比盧遮那成仏経巻第三	こんしきんでいだいびるしゃなじょうぶつきょう　かんだいさん	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	巻子本	全長802cm，幅25.8cm	紺紙十六紙を継いでおり，紺紙の表には金泥で宝相華（ほうそうげ）文と「大[84af]盧遮那成仏経巻第三」の経題を書き，見返しには山水，家屋，蓮池を描き，屋内には二人の僧が対座し，外には数人の僧がいる様子が描かれている。杉製の軸の両端には金銅[84a3]形（ばちがた）金具をはめ，魚々子（ななこ）で宝相華文様を彫っている。本文は「大[84af]盧遮那成仏神変加持経世間成就品第五」から書き始め，銀罫の間に金泥で楷書で書き写した装飾経である。奥書はないが平安時代末期（12世紀後半）の作。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財（典籍）	紺紙金泥大田比盧遮那成仏経巻第五	こんしきんでいだいびるしゃなじょうぶつきょう　かんだいさん	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	巻子本	全長900cm，幅26cm	紺紙十七紙を継いだ経巻で，紺紙の表には金泥（きんでい）で宝相華（ほうそうげ）文様を描き，題箋に「大[84af]盧遮那成仏経巻第五」の経題を書き，見返しには鷲霊山での釈迦説法の図を描いている。軸木は杉製で，両端に金銅撥形（こんどうばちがた）金具に魚々子（ななこ）で宝相華文様を彫り出したものをつけている。本文は「大[84af]盧遮那成仏神変加持経巻第五，字輪点第十」から書き始め，銀罫の間に金泥をもって楷書で記した装飾経で，奥書はないが，鎌倉時代初期（13世紀前半）の作。		
県	重要文化財（考古資料）	貝ケ原遺跡出土の特殊器台形土器	かいがはらいせきしゅつどのとくしゅきだいがたどき	1点	尾道市御調町市 御調町教育委員会	昭62.12.21		現高68.5cm，脚部最大径41.1cm，胴部最大径23cm	この特殊器台形土器は，昭和43年（1968）御調町貝ケ原に位置する御調川沿いの左岸丘陵の土取り工事中に出土したといわれる。特殊器台形土器は，特殊壷形土器とともに，弥生時代後期の中頃（2世紀頃）以降に，吉備（岡山県・広島県東部）を中心とした墳墓から出土する。集落遺跡から出土する日常使用される器台や壷に比べて，極めて大型化すること，鋸歯文（きょしもん）・斜格子文（しゃこうしもん），連続S字状の文様などの特徴ある文様で飾られること，赤色顔料が表面全体に塗られることなどの点で大きく相違し，墳墓の葬送に関わる土器と考えられている。本例は特殊器台形土器の中では古式の様相を示すものであるとともに，吉備の中枢（岡山県南部）においてもこのような完存に近いものはなく，極めて貴重な資料の一つといえる。		
県	史跡	太田貝塚	おおたかいづか		尾道市高須町字出口，同字竹之端	昭24.8.12 昭48.12.18（一部解除）	縄文時代前期～後期（約6000～3000年前）		松永湾西部の標高約3mの微高地に位置し，かっては直接海浜に接していた縄文時代（約12,000～2,300年前）の貝塚である。古くから多数の人骨を出土して著名であるが，その所属時期はたしかでない。縄文時代の遺物としては，前期，中期，後期の土器があり，前期土器は貝層下の有機砂層に包含される。土器のほか多量の石鏃（せきぞく），石匙（せきひ），石錐（せきすい）やハイガイ・アガキ・アサリなどの貝類，獣骨などが出土し，狩猟・漁撈の生活を物語っている。なお昭和39年（1964）の調査では，遺跡の東半部に幅2.6m，深さ0.85mの溝状遺構が南北にわたって検出され，多量の古式土師器や製塩土器が出土した。現在，貝塚の一部は史跡公園として活用されている。		
県	史跡	因島村上氏の城跡 長崎城跡 青木城跡 青陰城跡	いんのしまむらかみしのしろあと（ながさきじょうあと，あおきじょうあと，あおかげじょうあと）		尾道市因島土生町 尾道市因島重井町 尾道市因島中庄町・田熊町	昭32.9.30			中世瀬戸内海中央に勢威をふるった因島村上氏の主要な城跡群である。 因島の南端にある長崎城跡は，村上氏の燧灘(ひうちなだ)方面に対するもので最初の拠点と考えられるが，現在，日立造船敷地内にあり，遺構はほとんど失われている。 島の北端にある青木城跡は向島の余崎城と共に布刈(めかり)瀬戸を見張る城として利用され，標高50mの本丸を中心に東の大手に向かって郭が連なる。なお，城麓には的場・裏木戸の地名を伝える。 島の中央の青陰城跡は，標高275mの山頂に位置し各要衝を指揮する拠点になっていたと思われ，三の丸を西端に，東へ郭が並んだ城跡である。城麓には大手・裏木戸・陣屋・水落などの地名を伝える。		関連施設：水軍城資料館（0845-24-0936）
県	史跡	鷲尾山城跡	わしおやまじょうあと		尾道市木之庄町木梨	昭52.3.4			建武3年（1336），足利尊氏に従い九州多々良浜(たたらはま)（博多）の戦いで戦功をたてた備後の豪族杉原信平・為平兄弟が木梨13ヶ村を領知し，翌年木梨山に鷲尾山城を築いて以来250年間，木梨杉原氏の本城として盛衰をみた山城の跡と伝えられる。 東側の木梨川および西側の谷川を天然の堀とし，標高320mの険しい山を利用したこの山城はよく保存されており，面積880㎡の本丸をはじめ二の丸・土塁跡・帯曲輪・出丸（馬場跡）および南側に4段と北西側に8段の曲輪が残っている。		
県	天然記念物	御寺のイブキビャクシン	みてらのいぶきびゃくしん		尾道市瀬戸田町御寺字西郷	昭24.10.28			イブキビャクシンは針葉高木で，日本では主として青森県以南の太平洋岸地域に自生するが，多くは庭園木として栽培されている。本樹は県内有数のイブキビャクシンの巨樹である。樹高は7.6mで，主幹は地ぎわで東西の二大支幹にわかれ曲折しており，植物形態学上からみても価値の高いものである。なお，イブキビャクシンは，ビャクシンの別名である。		
県	天然記念物	山波艮神社のウバメガシ	さんばうしとらじんじゃのうばめがし		尾道市山波町	昭34.7.15			ウバメガシは，我が国南西部の海岸地帯と中国大陸の南東部に融離分布する常緑のカシである。本樹は，地上約1.5mで大小数多くの支幹に分かれ，さらに南方にやや離れて三支幹が地面から出ているので，現状では一樹叢の観を呈するが，本来，単一の樹木であると考えられる。全国有数の巨樹である。本樹は指定時，海岸近くに位置していたが，その後，生育環境の悪化により北方300mの尾道造船（株）構内へ移植された。		
県	天然記念物	垂水天満宮のウバメガシ群落	たるみてんまんぐうのうばめがしぐんらく		尾道市瀬戸田町垂水	昭53.10.4			本群落は，生口島西側の龍甲山（海抜約30m）内にある天満神社（垂水天満宮）参道の両側，南東及び南西斜面に発達している。樹高5～15mのアカマツが散生するが，ウバメガシが優占し，ほとんど純林の感がある。本群落は，群落の規模としてそれを淩駕し県内有数のものである。地上50cmの幹囲が1mを超える大木も見られ，本地方の海岸急傾斜岩地に特有なウバメガシ天然林の面影を留めるものとして貴重な存在である。		
県	天然記念物	阿弥陀寺のビャクシン	あみだじのびゃくしん		尾道市向島町岩子島	昭53.10.4			本樹は，樹高約16m胸高幹囲2.7mで，植栽されたものと思われるが，すでに県指定となっているビャクシンに比べて，直立性で，豊かに発達した枝篠が大きな広卵形の樹冠を形成し，樹勢も極めて旺盛である。かなりの巨樹である上，本種の生育形の一つを代表するものとして植物学的に価値が高い。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	仁野のナナミノキ	にののななみのき		尾道市御調町仁野字岡田沖	昭59.1.23			ナナミノキ（別名ナナメノキ）は関東地方以西の近畿，中国，四国及び九州の諸地方に生育し，中国にも分布するモチノキ科の常緑広葉高木である。南向きの緩斜面の畑地帯の中腹にある仁野谷観音堂の境内にあり，樹高約17m，胸高幹囲2.64mを測り，県内最大級の規模である。		
県	天然記念物	艮神社のクスノキ群	うしとらじんじゃのくすのきぐん		尾道市長江1丁目	昭63.12.26			艮神社は千光寺山麓，海抜12～20mに位置している。境内には，拝殿の東方に1株（1），社殿南側の階段状に並んだ台地の1，2，4段にそれぞれ1株計3株（2，3，4），合計4株のクスノキが大きな樹冠を広げている。それぞれ樹木の状況は次のようである。 （1）…神社の入口を入ってすぐ右側，拝殿の東前方に位置する最も大きい株である。主幹は地上2.7～3.2mの所で，太さの違う3支幹に分かれる。樹皮上にはコケ類が多数着生している。 （2）…南側階段台地の第1段，社殿寄りにある巨岩の横に生じ，樹幹がやや東に傾いている。 （3）…第2段にあり，樹幹はほぼ直立する。 （4）…最上段の北寄りにあり，（3）の株とほとんど同じ大きさである。		
県	天然記念物	鏡浦の花崗岩質岩脈	かがみうらのかこうがんしつがんみゃく		尾道市因島鏡浦町字小鏡	平17.4.18			鏡浦集落の北東端にある岬の突端から南に続く東海岸に見られる地質現象である。 黒色の泥質岩（でいしつがん）類を主体とする堆積岩類中に，優白質の花崗岩質岩脈が，南北方向にほぼ水平に貫入している。 岩脈の主脈部分は，北端では約2mの幅であるが，多少の膨縮を繰り返しながら，南に約120mにわたって連続している。主脈から分岐した支脈は幅数cmの細脈となっている。露頭の北端から約60m南では，淡緑色のランプロファイヤー岩脈が堆積岩類と花崗岩質岩脈を約1m幅で垂直に切って貫入している。 以上のような岩類から構成されるこの露頭は，広島県南部の地質現象を代表する典型的なものである。干潮時には，海岸に沿って連続する露頭を詳細に観察することができる。 （注１）「花崗岩」とは，石英・長石を主成分とする岩石で，ごま塩状に黒雲母が散在し，全体としては白みがかったものが一般的。通称は御影石と言い，建築材や墓石などの石材として多用される。 （注２）「岩脈」とは，マグマが他の岩石の割れ目に貫入して凝固し，脈状につながっているもの。この露頭の花崗岩質岩脈は，約9000万年～8000万年前の中生代白亜期後期に形成された。 （注３）「泥質岩」とは，岩石や鉱物のかけらが泥・粘土などの粒となり，堆積して固まって岩になったもの。この露頭の泥質岩類からなる堆積岩類は，中生代ジュラ紀（約２億300万年前～約１億3500万年前）に形成された。 （注４）「ランプロファイヤー」は，輝石・角閃石・黒雲母などの有色鉱物の割合が多い，濃色斑状の半深成岩。		
県	無形民俗文化財	太鼓おどり	たいこおどり		尾道市吉和町	昭40.10.29			隔年の旧7月18日に行うおどりで，吉和から出発して浄土寺にいたり，本堂前でおどる。浄土寺との関係はたまたま病魔退散のため，感謝奉納したのが因縁となったものであろう。 百数十名の大行列で，大宰領以下，太鼓方，小太鼓方，鉦（かね）方，その他御船方，船唄，狂言の各役に分かれているが，太鼓と小太鼓とが中心となるためこの名がある。 勇壮活発なおどりであるため，足利尊氏（あしかがたかうじ）の水軍に加わって戦功があった吉和の漁民が，戦勝祝いにおどったと伝えられているが，確証はない。恐らく元来は念仏おどりであろう。享保3年（1718）の記事や嘉永3年（1850）の古図によってその歴史の古いことが分かる。		
県	無形民俗文化財	みあがりおどり	みあがりおどり		尾道市御調町	昭41.4.28			豊年の予測される旧暦7月17日に，高御調八幡神社に奉納されるおどりで，大太鼓と鉦（かね）のはやしにあわせて踊る。この踊りは古くは「高御調八幡奉納おどり」と言われており，「みあがり」の語源は足利尊氏と結びつけた「都あがり」より，むしろ氏神への踊りを奉納するための「宮あがり」と思われ，古くから御調川沿いの各集落に伝えられ，農民の生活に密着したおどりである。おどり方，衣装，はやし方などから見て，豊年おどり，雨乞おどりなどの二・三の風流おどりをあわせたものと思われる。		
県	無形民俗文化財	名荷神楽	みょうがかぐら		尾道市瀬戸田町	昭43.4.27			名荷神楽は，もとは荒神舞と称して，明治初年までは4年に一度の託宣を伴い荒神社の式年の神楽であった。ところが明治5年（1872），太政官符により神職が託宣行事に関与することを禁じられたため，神楽から託宣を除き，民間の人々によって十二神祇素神楽として今日まで伝承されてきたものである。 演目のうち，「悪魔祓い」「三宝荒神宮縄」「剣舞」「王子」はよく古形を伝えており，なかでも「三宝荒神宮縄」は，赤白の紙を着せた人形に神酒を注ぎ，その色のにじみ方で神意をうかがうもので託宣神事の一部を伝えるものと思われる。		
県	無形民俗文化財	小味の花おどり	こみのはなおどり		尾道市原田町	昭45.1.30			この踊りは，行基の開基と伝える摩訶衍寺（まかえんじ）の秘仏十一面観音が，33年ごとに開帳される時奉納される踊りである。この花おどりは，花をつけた笠をかむった数十人の踊り子が，かん鼓，鉦（かね），笛にあわせて踊るものであるが，かつて花笠につける花は，上組は牡丹，下組は桜，小味組は菊と，組によって異なっていたという。 踊りは数多いが，そのなかで「糸屋踊」は太鼓20張を主体にした摩訶衍寺の法要に際して演ぜられるもの，「雨乞踊」は，寺の上方の竜王を祀った台地で踊られるもので，雨乞のおどりとそのお礼おどりである。		
県	無形民俗文化財	神楽	かぐら		尾道市御調町	昭46.12.23			この神楽は，「千草舞」「悪魔払」「三恵比須」「折敷舞」などの舞によって構成されており，畳2枚の広さの中で舞う備中神楽の古型を多分に残している。 その中で「折敷舞」というのは，神の献饌に用いる折敷を採物とした舞で，もとは榊舞・剣舞・茣蓙舞（ござまい）などと同じく，神楽の最初に舞われる儀式舞の一つであったが，明治初年にこの舞に趣向が加えられ，折敷のかわりに盆や刀身を持ち，それに多数の盃をのせて舞う舞となった。なお，「三恵比須」などの狂言舞は古風な笑いを伝承しているものである。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	無形民俗文化財	木ノ庄の鉦太鼓おどり	きのしょうのかねたいこおどり		尾道市木ノ庄町	昭54.3.26			この「おどり」は,大太鼓・大鉦（おおがね）・笛・カッコ等を囃しつつ,木ノ庄市原の幣高八幡神社の秋祭に奉納するおどりである。本来は,豊作の予測される歳の夏に,五穀豊饒を感謝して八幡神社に奉納する行事であったと思われるが,のち夏の虫送り行事ともなり,更には旱天続きの際の雨乞いおどりともなり,はては盆ごろに行われるところから,地元に関係の深旧城主杉原氏の慰霊おどりという意味も加えられた。		
県	無形民俗文化財	椋浦の法楽おどり	むくのうらのほうらくおどり		尾道市因島椋浦町	昭56.4.17			尾道市因島の椋浦町金蔵寺に勢揃いした「法楽おどり」の一団は，午後４時ごろ，一本の幡（ばん）を先頭として，町内の艮（うしとら）神社に向かって行進する。この時刻は，最後に汐の引いた海岸でおどる時の汐加減のためである。 このおどりの起源は明らかでないが，地元の所伝によれば，中世ごろ因島を中心とした水軍が，出陣の時は椋浦で戦いの勝利と隊士の安全を祈り，帰陣の際は中庄で勝利を祝うとともに戦没者の追悼を行ったというが，その時の行事が「法楽おどり」の起源であるという。侍らしい軽装に太刀，早駈けの姿勢や跳ぶような動作，六字の名号に大幡などから，水軍に関係のあったことがうかがえる。		
県	無形民俗文化財	中庄神楽	なかのしょうかぐら		尾道市因島中庄町	昭57.2.23			毎年4月15日と10月15日に中庄八幡神社に奉納される神楽である。本神楽団には「昭和3年5月上旬」に宮地左近春光の書写した「神楽台本」が保存されており，記述によれば安政7年（1860）のものと推定される。 本神楽団はこの台本に記載された演目をすべて上演でき，荒神神楽の古型を保っている点で貴重である。 なお,本神楽と同じく「十二神祇」を称するものに,豊田郡瀬戸田町の生口島名荷の荒神神楽がある。		
国	登録有形文化財（建造物）	吉原家住宅表長屋門	よしはらけじゅうたくおもてながやもん	1棟	尾道市向島町	平9.7.15	木造平屋建，瓦葺，明治18年（1885）建設	建築面積114㎡	広大な屋敷構えを持つ農家の長屋門形式の表門である。明治時代の建築であるが，文政8年（1825）の家相図により，その時にあった門の規模・形式を継承したものと推定される。向島では類例が少ない長大な規模を持つ表門で，普請関係の記録も残る。		
国	登録有形文化財（建造物）	白滝山荘（旧ファーナム住宅）	しらたきさんそう（きゅうふぁーなむじゅうたく）	1棟	尾道市因島重井町伊浜	平11.10.14	木造一部鉄筋コンクリート造3階建，瓦葺，昭和6年（1931）頃建設	建築面積105㎡	白滝山荘は,因島市の北部にある霊山白滝山（標高226.9m,市指定史跡・名勝）の登山口に位置するアメリカ人宣教師の居宅で，斜面に建ち，1階を鉄筋コンクリート造，2・3階を木造とする。急傾斜屋根にドーマー窓を付けたハーフティンバー・スタイルの洋館で，ヴォーリズ建築事務所の作風の一端をよく伝えている。		
国	登録有形文化財（建造物）	耕三寺山門	こうさんじさんもん	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	鉄造，間口4.5m		耕三寺境内の北端にあって，伽藍中心軸上に位置する。柱4本を立て，中央に両開，両端に片開の扉を吊り，両袖は瓦葺とする。柱，扉ともに鉄製で，白色を基調に随所に丹色を配し，扉にはさまざまな絵柄の装飾を施す。街路に面して境内のランドマークとなる建造物である。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	登録有形文化財（建造物）	耕三寺中門	こうさんじちゅうもん	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造，瓦葺，間口3.6m		四間二戸の二重門で，入母屋造，本瓦葺。法隆寺の西院伽藍の中門を原型とするが，梁間は二間とし，各部比例も異なる。組物等の装飾はおおむね原型を踏襲しているが，飾金具，彩色などを多用し，壮麗な外観としている。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	登録有形文化財（建造物）	耕三寺羅漢堂	こうさんじらかんどう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19			中門の両側に続く回廊状の建築で，内部に羅漢像を安置する。左右とも桁行17間，梁間1間の規模で，本瓦葺，切妻造とする。外壁面を連子窓，内側を枝扉。小屋は虹梁，扠首組に化粧屋根裏とする。中心伽藍のなかでは最も初期の建築である。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	登録有形文化財（建造物）	耕三寺鐘楼	こうさんじしょうろう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19			羅漢堂東側背面に建ち，鼓楼と同じ規模形式を持つ。桁行3間，梁間2間，入母屋造，本瓦葺で，白漆喰の袴腰を備える。新薬師寺鐘楼を模したもので，上部に高欄を持たない縁を張り出す。上層内部は中央部を吹き抜けとし，両側に床を張る。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財（建造物）	耕三寺鼓楼	こうさんじころう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建，瓦葺	建築面積32㎡	羅漢堂西側背面に建ち，鐘楼と対をなす。鐘楼と同規模同形式で，細部装飾に至るまでほぼ完全に同一である。1階は4半敷の土間とし，上層に高欄を設けない縁を出し，二手先の組物に二軒繁垂木，入母屋造，本瓦葺とする。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	登録有形文化財（建造物）	耕三寺仏宝蔵	こうさんじぶっぽうぞう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建，瓦葺	建築面積83㎡	一連の伽藍からはやや東寄りに建つ，桁行5間，梁間2間，平入，入母屋造，本瓦葺の宝蔵。内部は板敷きで一室とする。耕三寺の建築の中では比較的簡素で，新薬師寺本堂を模したとされるが，規模，各柱間に長押，連子窓を設ける外観など大きく異なる点が多い。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	登録有形文化財（建造物）	耕三寺法宝蔵	こうさんじほうほうぞう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建，瓦葺	建築面積180㎡	伽藍中央に建つ宝物館で，僧宝蔵と対をなす。桁行4間，梁間3間の身舎四周に裳階を廻らす。屋根は入母屋造，本瓦の錣葺とする。四天王寺金堂を模したといわれるが，法宝蔵は妻入であり，屋根勾配，各部比例なども大きく異なる。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	登録有形文化財（建造物）	耕三寺僧宝蔵	こうさんじそうほうぞう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建，瓦葺	建築面積180㎡	伽藍中段東側に建ち，同型同規模の法宝蔵と五重塔をはさんで対をなす。四天王寺金堂を参照しつつ大きく外観を変え，身舎は円柱に二手先，裳階は角柱に平三斗とし，内部は折上格天井の大空間とする。昭和前期における大規模木造寺院建築の好例である。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	登録有形文化財（建造物）	耕三寺至心殿	こうさんじししんでん	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建，銅板葺	建築面積114㎡	伽藍最上段西側に建ち，信楽殿と対をなす。法界寺阿弥陀堂を模したと伝えられ，5間四方の身舎に吹き放しの裳階を設け，屋根は宝形造，銅板葺。組物は平三斗で，裳階の正面中央部のみ一段高く屋根を設ける。内部は一室とし，各種用途に活用されている。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	登録有形文化財（建造物）	耕三寺信楽殿	こうさんじしんぎょうでん	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建，銅板葺	建築面積104㎡	伽藍最上段の東側に建つ。至心殿とは対をなし，同規模同形式とするが，平面などに若干の違いがある。身舎柱は円柱，裳階柱は角柱で，講堂として用いられる身舎内部は一室とし，天井は折上小組格天井。四周外壁は蔀戸を見せるが，内部には壁が設けられている。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	登録有形文化財（建造物）	耕三寺本堂	こうさんじほんどう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建，瓦葺	建築面積271㎡	中堂，左右翼廊，尾廊からなる堂宇。いずれも本瓦葺とし，軸部，壁面，建具に至るまで極彩色を施し，飾金具を用いる。平等院鳳凰堂を模しているが，細部においては異なる点も多く，内部外部とも壮麗さを増しており，耕三寺の中核建築として知られている。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	登録有形文化財（建造物）	耕三寺多宝塔	こうさんじたほうとう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造多宝塔，銅板葺	建築面積25㎡	本堂西方に建つ。石山寺多宝塔を模しており，下層は方3間の周囲に縁を廻らし，上層は円形平面で四手先組物で二軒繁垂木の軒を支え，屋根は上層下層とも銅板葺とする。比較的原作に忠実であり，組物等に彩色を施した外観は壮麗である。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	登録有形文化財（建造物）	耕三寺八角円堂	こうさんじはっかくえんどう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建，瓦葺	建築面積71㎡	本堂を挟んで多宝塔と対置される。正八角形平面を持ち，屋根は宝形造，本瓦葺。法隆寺夢殿を模しているが，規模を縮小している。柱は八角柱で，組物は隅部出三斗，中備は平三斗，内部は板敷で，中央は鏡天井，周囲を格天井とする。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財（建造物）	耕三寺銀龍閣	こうさんじぎんりゅうかく	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建，銅板葺	建築面積40㎡	境内南東方の庭園池泉に張り出して建つ。八畳大の板間の三方に縁を廻らし，東側に床と小室を設ける。屋根は宝形造の銅板葺。板間は鏡天井として龍の絵を描き，軸部はすべて銀色とする。板間の障子に花頭窓を設ける点も特徴的で，特異な意匠の建築である。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	登録有形文化財（建造物）	耕三寺潮聲閣	こうさんじちょうせいかく	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造及び鉄筋コンクリート造平屋一部2階建，瓦葺，車寄付	建築面積389㎡	境内東北隅に建つ住宅建築。ポーチを持つRC2階建の洋館と，唐破風の玄関を持つ木造平屋建の和館からなり，洋館，和館玄関，老人室など各所に意匠を凝らす。洋館と和館を並立させる昭和初期の大規模住宅建築の特徴をよく伝える。		関連施設：耕三寺博物館（0845-27-0800）
国	登録有形文化財（建造物）	久山田貯水池堰堤	ひさやまだちょすいちえんてい	1基	尾道市久山田町	平16.11.29	粗石モルタル積表面張石造　堤長75.0m　堤高22m　有効貯水量754,000?		大正１４年尾道市水道開設に伴い建造。市南西部を流れる門田川に建設された。中央に越流部を設けた堤長７５ｍ，堤高２２ｍの石張コンクリート造堰堤で，堤体右岸寄りに半円状の取水塔を張り出す。平面形状は副堰堤との同心の円弧とし，重力式とアーチ式を複合した構造形式が特徴。		
国	登録有形文化財（建造物）	長江浄水場着水井	ながえじょうすいじょうちゃくすいせい	1井	尾道市長江	平16.11.29	鉄筋コンクリート造　長方形　面積5.0㎡　内法長さ4.2m　幅1.2m　深さ2.4m		大正１４年尾道市水道開設に伴い建造。槇ケ峠の頂を約１２ｍ掘り下げて築かれた尾道市創設水道の浄水池施設の一つ。水源地より自然流下により導水された原水を受ける施設で，鉄筋コンクリート造隔壁で内部を区切り，天端には花崗岩を配す。		
国	登録有形文化財（建造物）	長江浄水場緩速ろ過池	ながえじょうすいじょうかんそくろかち	4池	尾道市長江	平16.11.29	鉄筋コンクリート造　扇形454㎡　深さ2.4m		大正１４年尾道市水道開設に伴い建造。着水井から導かれた水をろ過処理するための施設。外半径４８ｍ，内半径２４ｍ，中心角１２０°で，内部を隔壁により4等分とした扇形平面の鉄筋コンクリート造構造物で天端には花崗岩を配す。狭小地を巧みに利用した類例の少ない平面形状が特徴。		
国	登録有形文化財（建造物）	長江浄水場配水地	ながえじょうすいじょうはいすいち	1池	尾道市長江	平16.11.29	鉄筋コンクリート造　鉄筋コンクリート造り上屋計量室　内径27.0m　深さ3.0m		大正１４年尾道市水道開設に伴い建造。ろ過池と同心の半径１４ｍの円形鉄筋コンクリート構造物で内部は中央隔壁で2分される。池中心部の円井で滅菌水が注入されたろ過水を，円形２条の導流壁に沿って蛇行させることで撹拌作用を高める。円井上方にはアールデコ風の平面１２角形の上屋を設ける。		
国	登録有形文化財（建造物）	旧福井家住宅主屋	きゅうふくいけじゅうたく（おのみちしぶんがくきねんしつ）しゅおく	1棟	尾道市東土堂町	平16.11.29	木造平屋建、瓦葺	建築面積210㎡	尾道水道に臨む斜面に南面して建ち，寄棟造の東棟が大正元年，入母屋造の西棟が昭和２年築で，ほぼ中央の玄関を挟んで巧みに連続する。木造平屋建，桟瓦葺で，檜を中心に楓や鉄刀木（たがやさん）などの銘木を多用した上質な造りになり，瀟洒な数寄屋風の意匠でまとめている。		
国	登録有形文化財（建造物）	旧福井家住宅茶室	きゅうふくいけじゅうたく（おのみちしぶんがくきねんしつ）ちゃしつ	1棟	尾道市東土堂町	平16.11.29	木造平屋建、瓦葺	建築面積28㎡	昭和３年築。主屋西棟の北西部に連結しており，尾道の近代における茶室趣味の有様の一端を物語っている。規模は小さいが，木造平屋建，桟瓦葺で，４畳半茶室に廊下を挟んで控えの間が付属した形式になっている。主屋と同じく良材を持ち，洗練された丁寧な造りである。		
国	登録有形文化財（建造物）	旧福井家住宅蔵	きゅうふくいけじゅうたく（おのみちしぶんがくきねんしつ）くら	1棟	尾道市東土堂町	平16.11.29	土蔵造2階建、瓦葺	建築面積25㎡	土蔵造２階建，南北棟の切妻造，妻入で，蔵前が主屋西棟の北側に連続している。規模は桁行６ｍ，梁間４ｍ，屋根は桟瓦葺，外壁は漆喰塗で，１･２階境に蛇腹風の段をつけて水切り瓦を廻す。２階妻面には小庇付の窓を設ける。主屋と一連の丁寧な造りになる。建築時期は主屋東棟とほぼ同時期の大正元年ごろと考えられる。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財（建造物）	竹村家主屋	たけむらやしゅおく	1棟	尾道市久保	平16.11.29	木造2階建、瓦葺	建築面積481㎡	大正９年築。木造2階建，桟瓦葺で，北が道路，南が海に面している。全体は南北棟の北側と東西棟の南側が直交したT字型の形態で，竹材の細工や造作を多用した繊細な書院造である。北正面は棟違いの八棟造風に扱うなど，外観は重厚かつ豪放で，地域景観の核になっている。		
国	登録有形文化財（建造物）	竹村家門及び塀	たけむらやもんおよびへい	1棟	尾道市久保	平16.11.29	木造、瓦葺、間口2.4m、塀延長20.0m		大正９年築。門は北辺西寄りに設けられた切妻造，銅板葺の棟門で，簡素な袖塀がつく。これに続く塀は，真壁造，桟瓦葺で，腰から上を黒漆喰壁とし，簾を入れた横長の小窓を開け，重厚さと繊細さを併せ持つ。敷地の北辺と西辺を区画しつつ，街路景観を整えている。		
国	登録有形文化財（建造物）	長江浄水場ベンチュリー上屋	ながえじょうすいじょうベンチュリーうわや	1棟	尾道市長江三丁目	平23.1.26	鉄筋コンクリート造平屋建，切妻造，建築面積5.9㎡		尾道市街の丘陵上にある浄水場南端に建つ。桁行2.6m，梁間2.6m，鉄筋コンクリート造，切妻造妻入で，正面出入口に切妻屋根の庇を付ける。軒下や妻面に繰型風の持送りを付けるなど，木造洋風建築を鉄筋コンクリート造で表現した上屋である。 大正14年建設。		
国	登録有形文化財（建造物）	旧高橋家住宅主屋	きゅうたかはしけじゅうたくおもや	1棟	尾道市日比崎町	平23.7.25	木造2階建，瓦葺，建築面積230㎡		栗原川沿いの敷地中央に東面して建つ。桁行18m梁間13m，木造二階建，入母屋造桟瓦葺で，南東隅に応接間と玄関を張り出す。周囲を開放的に造り，屋根は入母屋破風を複合させ，応接間に洋風意匠を採用するなど，変化のある外観になる大型住宅である。		
国	登録有形文化財（建造物）	旧和泉家別邸	きゅういずみけべってい	1棟	尾道市三軒家町	H25.12.24			千光寺山南西斜面の石垣上に立つ小住宅。木造2階建で下見板張の和館の南にモルタル塗の洋館を接続する。変形の小敷地を巧みに利用しており，2階8畳座敷や階段の造作も丁寧である。入母屋屋根に切妻破風や小庇，露台をつけ，変化に富んだ屋根構成を見せる。		
国	登録有形文化財（建造物）	みはらし亭	みはらしてい	1棟	尾道市東土堂町	H25.12.24			千光寺山東方斜面の参道に面する木造2階建。高い石垣の上に建ち，東面に縁を設けて尾道水道の眺望を得る。2階北端に12畳の主座敷を設け，南端の室は敷地形状により上下階とも変形平面を呈する。屋根は入母屋造桟瓦葺で，軒は丸太の化粧垂木を隅扇に配る。		
国	登録有形文化財（建造物）	西山本館	にしやまほんかん	1棟	尾道市十四日元町	H27.3.26			旧出雲街道に面して建つ現役の旅館。木造二階建と三階建の棟が複雑に組み合わされ，全ての客室が庭に面するよう工夫されている。丁寧な仕上げの数寄屋（すきや）風の和室のほか，かつて外国人船員の宿泊にも対応して洋室三室を持つなど，港町の風情を醸す木造旅館建築。		
国	登録有形文化財（建造物）	多門亭	たもんてい	1棟	尾道市東土堂町	平31.3.29	木造2階建，瓦葺	建築面積125㎡	千光寺山南腹にある旧料亭。切妻造りの総二階建てで上下階に各玄関を設け，一階に中廊下を通して小座敷を並べ，二階に大座敷を配する。山腹に広がる市街地の歴史的景観の構成要素である。		大正９年頃／昭和40年頃改修
国	登録有形文化財（建造物）	向酒店店舗兼主屋	むかいさけてんてんぽけんおもや	1棟	尾道市久保一丁目	令2.4.3	木造二階建，瓦葺	建築面積77㎡	向酒店店舗兼主屋は尾道市街地に建つ店舗兼用住宅。大屋根は桟瓦葺だが，一階正面の庇（ひさし）を本瓦葺として重厚に見せる。二階の建ちは高く，近代の町家の特徴を持っている。		大正14年頃

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財（建造物）	旧尾道市役所百島支所庁舎	きゅうおのみちしやくしょももしましょちょうしゃ	1棟	尾道市百島町	令4.10.31	木造2階建，鉄板葺	建築面積251㎡	百島北東部にある役場庁舎。木造二階建，半切妻造で，縦長窓を基調に洋風とし，正面頂部ガラリと二階の四連窓が特徴的。二階はキングポスト・トラスで大広間とし，一階カウンター付事務室が往時を伝える。現在，ゲストハウスとイベントスペースとして活用。		昭和29年／令和元年改修
国	登録有形文化財（建造物）	旧村井醫院診療棟	きゅうむらいいいんしんりょうとう	1棟	尾道市御調町市	令5.8.7	木造平屋建，桟瓦葺	建築面積89㎡	山陽道と出雲街道が交わる御調（みつぎ）の町にある洋風の医院建築。診療棟は、寄棟造り桟瓦葺きで、外壁は下見板張と定規柱風にモルタル塗り仕上げとする。ペディメント付きの上げ下げ窓と石柱の門が街道沿いの歴史的景観を形成する。		大正7年／昭和中期・平成24年改修
国	登録有形文化財（建造物）	旧村井醫院門柱	きゅうむらいいいんもんちゅう	1基	尾道市御調町市	令5.8.7	石造，石柵付	間口1.9m			大正7年頃／昭和中期改修
国	登録有形文化財（建造物）	旧宮地醤油店離れ（林芙美子旧居）	きゅうみやちしょうゆてんはなれ（はやしふみこきゅうきょ）	1棟	尾道市土堂一丁目	令5.8.7	木造二階建，鉄板葺	建築面積12㎡	尾道駅に程近い商店街にある醤油店の付属建物。短冊形敷地背面側に建ち、離れや醤油蔵、一時貸家とした。当地では東風を避けて二階東面は壁として妻側に窓を設けるが、その特徴を持つ。大正6年頃には小説家林芙美子が入居しており、現在、資料館として活用。		明治中期／昭和51年頃改修
国	登録有形文化財（建造物）	旧小野産婦人科医院	きゅうおのさんふじんかいいん	1棟	尾道市十四日元町	※未告示	木造三階建、鉄板葺	建築面積100㎡	尾道の中心部に位置する旧産婦人科医院。隅切した角地に建つ木造三階建てで、庇や付柱など直線的構成で角地を強調した外観が印象的な医院建築。現在は店舗等として活用。		（令和6年11月22日登録答申）
国	登録有形文化財（建造物）	旧小林家住宅主屋	きゅうこばやしけじゅうたくおもや	1棟	尾道市長江	※未告示	木造二階建、瓦葺	建築面積172㎡	長江通り東側の石垣上に建ち、洋画家小林和作（わさく）が晩年まで居住した主屋。二階はアトリエとして用い、西面に掃出窓を開けた眺望優れた主屋。現在は小林和作の遺品展示や交流施設として活用。		（令和6年11月22日登録答申）
国	登録有形文化財（記念物）	瓢箪島	ひょうたんじま		尾道市瀬戸田町 愛媛県今治市上浦町	平25.3.27		8,958平方メートル（全島17,576平方メートル）	瓢箪島は瀬戸内海に浮かぶ瓢箪の形をした無人島で，広島県尾道市の生口島(いくちじま)と愛媛県今治市の大三島(おおみしま)との中間に位置する。島の周囲は約700メートルあり，県境が横切る瓢箪形のくびれ部を挟んで，広島県側の最高所は標高23.4メートル，愛媛県側の最高所は標高35.2メートルである。 昔，生口島の神と大三島の神が島取りを目的として綱引きを行ったため，くびれてしまった島の形を双方の島民が心配して和解することとなったという民話が伝えられている。島の周辺海域は良好な漁場であることから，その漁業権をめぐる紛争に端を発して生まれた民話であろうと考えられており，多発した境界争いの証拠として，島内には明治時代の境界石も残されている。また，瓢箪形の小島を誇らしく歌い上げた舟歌も伝えられており，島の風致景観は漁師たちの間でももてはやされて来たことが知られる。 瓢箪島は，昭和39年に放映が開始されたNHKのテレビ人形劇『ひょっこり，ひょうたん島』のモデルとなったとされる島の一つとしても著名である。再現することが容易でない名勝地として意義深い。		